2007年度基盤研究 身体知プロジェクト 研究会報告「体をひらく、心をひらく」

---2006・2007 年度の身体知実験授業を振り返って---

井上ウィマラ Vimara Inoue 佐藤仁美 Hitomi Sato 岩下徹 Toru Iwashita 小野京子 Kyoko Ono コーディネーター 熊倉敬聡 Takaaki Kumakura 手塚千鶴子 Chizuko Tezuka 横山千晶 Chiaki Yokoyama



慶應義塾大学教養研究センター主催 2007年度基盤研究 身体知プロジェクト 研究会報告「体をひらく、心をひらく」

- 2006・2007 年度の身体知実験授業を振り返って-

2008 年 1 月 21 日(月) 16:30 ~ 19:30 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舍 2 階 中会議室にて

Program

- 16:30 ~ 授業のコーディネーターによる報告 2年間の実験授業で何が体験され、どんな学びがあったのか? ~そこでの「学びの形態」、「教育方法」、「課題」とは~
- 18:30~ 授業参加者を交えた自由討議

慶應義塾大学教養研究センター基盤研究身体知プロジェクト実験授業は、「従来の大学での教育は理論的言語による知が重視され、またアート教育といえば、アート専攻の学生のための教育が主であった。この実験授業では、これまで大学教育でないがしろにされてきた身体を、積極的に発声、呼吸、ムーブメント、コラージュ、造形など多様なアート体験と表現を通過させることで、その身体をほぐし、身体と心を柔らかくつなぎ、あらたな気づきの醸成を試みる。また、それらの試みを通しての自己理解や成長をうながし、学生達が、日々の学習や生活の営みに活かせる授業をめざす。」という趣旨でスタートしたものです。

ゲスト講師 井上ウィマラ (高野山大学准教授)

佐藤仁美 (放送大学准教授、臨床心理士) 岩下 徹 (京都造形芸術大学客員教授) 小野京子 (表現アートセラピー研究所代表)

コーディネーター 手塚千鶴子 (慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授)

熊倉敬聡 (慶應義塾大学理工学部教授、教養研究センターコーディネーター)

横山千晶 (慶應義塾大学教養研究センター所長、法学部教授)



左:手塚千鶴子氏 中央:熊倉敬聡氏 右:横山千晶氏

身体知実験授業の誕生

日本語・日本文化教育センター教授 手塚千鶴子

日吉の教養研究センターの身体知プロジェクトの一貫として、身体知の実験授業を、「体をひらく、心をひらく」というタイトルで、2006年度秋学期に、ワークショップ形式の授業としてスタートさせた。これは身体知を育む、身体知から学ぶすべを学ぶ授業なのか、はたまた身体知とは何なのか。これは簡単に答えのみつからない問いである。

そもそもその母体となっている教養研究センターの基盤研究身体知プロジェクトに加わったのは、2005年だったと記憶している。その当時のプロジェクトの枠組みでは、「身体知」とは何かをめぐる議論を重ねたうえで、実験授業へということであったが、実は、その議論を尽くす前に、とにかく、授業を構想し走らせてみようではないかという情熱に動かされての、この授業の出発であった。そこには、普段担当している授業科目や専門分野の枠を越えて、今日の大学教育、あるいはそこで生きる学生達をめぐる、ある種の危機意識が共有されていた。しかもそれは、各自深くパーソナルな自分自身の身体とのかかわりかたを反映した深い想いをともなうものであった。

しかしそれはまた地球的、今日的な規模をもつ課題に 根ざしていた。歴史的にふりかえれば、近代西洋が重視 してきた理性、合理的、分析的な知性、頭が強調されすぎ、 感情、感性、といった心が無視されがちで、さらにそれ らすべてと、人間存在の根源で結びついているはずの身 体とのつながりが、現代において実はとてつもなく深く 失われているのではないかとの不安に根ざしている。そ うして、われわれの出会う学生達は、全人的なバランス を失い、頭、心、体の連携、あるいはそれらの間のエネ ルギーの心地よい循環から疎外され、そのためであろう か、体が、思考が、感情が、こわばっているのではない かという危惧と焦燥があった。そこには、学生達が、自 分の生と力づよく取り組む精気を見失い、どこかただ忙 しく浮遊しているかのような感覚が、授業内外の彼らと のかかわりの中で、醸成されていたのではないか。そう した言葉にしにくい想いに突き動かされて、とにかく、 何とか一歩を踏み出そうということになったのである。



手塚千鶴子氏

そこで生まれたのが、2006年の呼吸や、柔軟な体のムーブメント、それに手とノリとハサミをもちいてのコラージュ、そして連句をつくりあげるという構成の授業である。体と心をほぐし、お互いにひらいていく道を探ろうとした。2007年には、「アートで体をひらく、心をひらく」として、身体性を活かしつつ、多様なアート表現を媒介に、さらに自然に心と体が手をたずさえていく授業を展開させた。さてこの2年間の実験授業で、果たして、どんな学びが、どんな構成や条件で、どんな風に起こったのだろうか? 何がちがっているのか? 参加者は果たして「身体知」を育めたのか? 「身体知」から学ぶ喜びを味わえたのだろうか? いやいや、そもそも、「身体知」とは、なんなのだろうか? 共に考えてみたい。

PROFILE

慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授

1968 年東京外国語大学英米科卒業、1978 年慶應義塾大学修士 課程社会学研究科修了。1986 年ミネソタ大学大学院(Counseling & Student Personality Pychology) 博士課程修了(教育心理学博士) 慶應義塾大学国際センター国際教育課係主任、環境情報学部助 教授、国際センター助教授を経て現職。

専門はグローバリゼーション下の多文化間カウンセリング、異 文化コミュニケーション、日本文化論。

2年間の実験授業で何が体験され、どんな学びがあったのか?

~そこでの「学びの形態」、「教育方法」、「課題」とは~

手塚千鶴子(慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授) 熊倉敬聡(慶應義塾大学理工学部教授、教養研究センターコーディネーター) 横山千晶(慶應義塾大学教養研究センター所長、法学部教授)

> 井上ウィマラ (高野山大学准教授) 佐藤仁美 (放送大学准教授、臨床心理士)

熊倉 本日は身体知の実験授業をめぐっての研究会ということで、まず教養研究センターの主催者側の、手塚と私と横山の3人から、この2年間行ってきた実験授業についての報告と問題点を述べさせていただきます。身体知の実験授業は「実験」といっているぐらいですから、いわゆる正規の学部の授業とは違い、卒業単位にもなりませんし、評価も付かない授業ですが、正規の授業にしたいという希望もあります。それに向かって何か提言もできればと思っております。その後、昨年の実験授業のゲスト講師でした佐藤仁美先生と井上ウィマラ先生にもお話しいただきたいと思います。

2006-2007年度 身体知実験授業報告

手塚 では、まず今日ご出席の方はほとんどが 2007 年度 の実験授業に参加された方だと思いますが、2006 年度も 参加された方、両方参加された方、今日たまたま来られ た方もいらっしゃいますので、私からは最初にこの実験 授業がどんな授業だったのかということをご説明します。

また、私もコーディネーターという立場ではありましたが、各授業のゲスト講師はそれぞれ外からお呼びして、一参加者として、参加した立場から見てどういう授業

だったのか、どんな学びがあったのか、その学びの形態 というのはどういうものだったかということについて、 まとめさせていただきたいと思います。

I. 授業報告

まず、実験授業を行うにあたって考えたことを少しお話しします。従来の正規の授業と異なり、ワークショップ型、学生参加型で、内容的には文芸や歴史の授業ではなく、心理教育的な内容の授業、そして身体を動かし、アートを用いるという方法を考えました。

1. 実験授業の背景にある基本理念

こうした考えの基礎にある当初の基本理念といえるものを以下に紹介したいと思います。"教養研究センター基盤研究身体知プロジェクト基本理念"として、2005年5月13日の第一回議事録にまとめられたものです。

「昨今哲学的および芸術的な意味を超えて、「身体論」や「身体知」という言葉がいろいろな場面で語られるようになってきている。それは単に肉体としての身体という意味のみならず、人間をホーリスティックにとらえた上での身体であり、当然ながらそこには精神性や感情論もふくまれてきている。このような身体に対する議論の背景には、時代のつきつ

けるひとつの危機感があることは否めない。つまりこれは テクノロジーの波の中で希薄化する身体存在やコントロー ル不可能な精神・感情・不安といった諸現象であり、それらの 危機感は教育現場では切実に意識されているものでもある。

同時に教育に関わるものが、人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れないという事実を明確に再認識し、その意識を共有していくことは重要である。そのような見地のもとに、21世紀の中で私たちが再見もしくは発見すべき「身体」は何であり、それを一つの「知」とした上で次世代に伝えていくのにどのようにしたらよいのかを、教職一体となって考える場が本プロジェクトである。

本基盤研究プロジェクトでは、そのような基盤に立った 上で身体知教育の理論化を試み、広く外部に発信するもの である。そしてこの目的のための方法の一つとして、実験 授業を通じて「身体知教育の意義と方法を探る」ことが明 らかとなる。」

身体論や身体知という言葉が盛んにささやかれ、私たちが身体とのつながりを失い、ホリスティックなものとして人間をとらえられない状況の中での危機意識があるわけですね。携帯を含めて、テクノロジーの波の中で、私自身の身体存在との付き合いが失われてしまっているのではないか。頭、心、体に分けていうと、上の頭ばかりになっているという危機感があり、これは教育の現場におられる先生は体験されていると思うのです。教育は、知的な部分だけでなく、身体を抜きにして語れないにもかかわらず、そのことが学校教育、大学でも抜け落ちている反省があったわけです。

これは、栗原彬先生と佐藤学先生が「プロムナード・身体をめぐる断章」(栗原彬・小森陽一他編『越境する知1身体:よみがえる』、東京大学出版会、2000年)で取り上げておられます。やはり「学校の身体が反乱している、学校は「身体なき言葉」と「言葉なき身体」がせめぎ合う場所である。」という言葉からも、同じ危機意識が共有されていることがわかります。

2. 身体知実験授業開始に当たっての授業の趣旨(06年夏)

こうした問題意識からスタートし、一昨年の夏に、

2006年度秋の最初の身体知実験授業を考えたときに次の 「身体知の実験授業開始に当たっての授業の趣旨」を私 どもここにおられる横山、熊倉両先生と作成しました。

身体知実験授業開始にあたっての授業の趣旨(06年夏)

「従来の大学での教育は理論的言語による知が重視され、またアート教育といえば、アート専攻の学生のための教育が主であった。この実験授業では、これまで大学教育でないがしろにされてきた身体を、積極的に発声、呼吸、ムーブメント、コラージュ、造形など多様なアート体験と表現を通過させることで、その身体をほぐし、身体と心を柔らかくつなぎ、あらたな気づきの醸成を試みる。また、それらの試みを通しての自己理解や成長をうながし、学生達が、日々の学習や生活の営みに活かせることをめざす。」

従来の大学教育は理論的言語による知を重視し、アート教育というとアート専攻の学生のための教育ということでしたが、この実験授業では、アート体験と表現を、身体を通すことによって、もう少し身体と心をつなぐ、そういう授業を考えましょうと企画されました。そこに、従来の授業で意図されてないような気付きが醸成されることを願って、授業を始めたわけです。

3. 授業概要報告

次に、授業概要報告です。

2006年度は「体をひらく、心をひらく」というタイトルで、2時間のセッションを8回行いました。授業は、金曜日に、3人のゲスト講師に2回ずつ授業を担当していただくかたちをとりました。各セッションでは毎回、最初にイントロがあり、最後に振り返りセッションという形で進めました。さらに授業全体のイントロのセッションと、ゲスト講師の全セッションが終わったあとの振り返りセッションを、一回ずつ行いました。内容を、簡単にまとめます。

2006年度「体をひらく、心をひらく一新しい実験授業へようこそ」

「皆さんの体そして心は、こわばっていないでしょうか?

なのに、意外ともろい? この実験授業は、そうしたこわばっていてもろいかもしれない体と心を、自分や他者を静かに見つめたり(メディテーション)、コラージュや連歌を創作したり、呼吸にあわせて体を動かしながら、少しずつ解きほぐし、開いていきます。きっと、あらたな自分・世界・他者との出会いが待っているでしょう」〔チラシより〕

参加者:学生、教職員、学外の教員等 19名

+コーディネーター3名

場所:来往舎シンポジウムスペース

時間:金曜日17時~19時、2時間×8回

(1) 06.9.29. オリエンテーション

オリエンテーションは、コーディネーターによる趣旨 説明と、参加者全員がこの授業に寄せる期待や想いを話 し、緊張とリラックスした気分の混じった雰囲気で自己 紹介を行なったウォーミング・アップのセッションです。

(2) 06.10.13. 呼吸 1

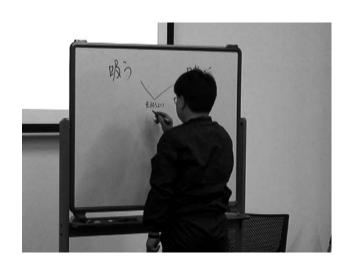
講師 井上ウィマラ氏(高野山大学准教授)

(2) と(3) のセッションでは井上ウィマラ先生がゲスト講師として授業を行ってくださいました。最初に呼吸ということで、呼吸とコミュニケーションと命が、それぞれつながっているという、簡単なレクチャーがあり、吸う、吐くについてイメージを連想し、ボードに言葉をみんなで書いていき、その後に質問、感想を言いあいます。そして自分の呼吸を感じる身体を用いたエクササイズを行いました。その後で、今度は吸うと吐くということを、実際に呼吸を感じた後どんなイメージを持ったのかを、やはりボードに寄せ書きしていくという形で進めていき、質問、感想をシェアしました。

更にその後に、今度はペアで相手の呼吸を感じるという、相手のおなかなど、触れてもいい部分に手をあてながら、呼吸に触れるペアワークをお互いに行いました。そのときの感想や浮かんだイメージを言葉や絵に書き、床に並べ、みんなで感想をシェアしました。













(3) 06.10.27. 呼吸 2

講師 井上ウィマラ氏

2回目は1回目の振り返りを行い、間でどんな気持や体の変化があったかを確認しました。その後でペアになってお互いの呼吸、それから動作を真似し合うという、ミラーリングをし、感想を述べ合いました。その後今度はペアで、面白かったのは呼吸のキャッチボールでした。呼吸をボールのようにして相手に届ける、そういうキャッチボールをしました。

その後、数グループに分かれ、グループで各自が具体的なイメージを持ちながら、何か相手に届ける、もらうという、言葉でなく、身体を用いてのコミュニケーションのプロセスを楽しみ、最後に全員で感想をいい合いました。

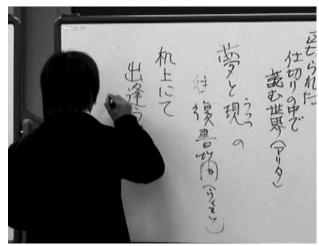
(4) 06.11.10. 連句とコラージュ1 講師 佐藤仁美氏(放送大学准教授)

(4) と (5) のセッションは佐藤先生のご担当でした。 最初はコラージュとはどういうことか、どうするのか など、簡単なレクチャーがあり、非言語で表現してみる ことの重要性と面白さについてお話をされました。

参加者の意見をききながらコラージュ用の模造紙を数 枚貼り合わせ、大きくして床におき、皆ほとんど無言の まま、次から次へと自分の好きなように形を切りだし紙 におき、貼ってコラージュを作っていく作業です。写真 にあるように、グループコラージュをしたわけです。そ れから鑑賞し感想を言い、最後にコラージュを全員で大 事にかつぎ、別室に静々と誇らしげに収納するという流 れでした。







(5) 06.11.17. 連句とコラージュ 2 講師 佐藤仁美氏

次に、今度は連句ですが、コラージュをしまっておいた部屋からみなで持ち帰り、全員で眺め、コラージュを刺激に、グループで連句を作りましょうということをしました。5、7、5、とある人が書いたら7、7と別の人がつなげる、連句を作るということで、最初にその5、7、5を一人ひとり、いくつか紙に書きました。その後、出来た人から、白板に書き出し、発句が決まった段階でどんどん連句を作りました。

そのとき「区切られた仕切りの中で読む世界」が発句となり、当日参加の井上先生が「夢とうつつの往復書簡」と付けてくださいました。そのように 5、7、5 を誰かが作ると、次に7、7 という流れになります。でそろったところで、最後に、感想を言いあいました。



(6) 06.12.8. ダンス 1 自分の体、自分と向き合う 講師 岩下徹氏(京都造形芸術大学客員教授)

この(6)、(7)のセッションはダンスですが、実は岩下先生の場合、いわゆるダンスというより、体をほぐすムーブメントを楽しむことを行いました。(6)では、自分の体や自分と向き合うセッション、次の(7)が他者と向き合う、他者と触れ合うセッションになりました。

柔軟体操で、ぶらぶら運動をしたり、体の力を抜いて、 岩下先生の合図で、時に寝返りを打ったり、手のひらを 使い床やいすや壁など、好きなところに転がっていき、 感じ取ったり、また合図でいったん立ち上がり、今度は すっと崩れる。そういった動作を、マイペースで行います。 その後、わき上がってきた気持ちや感情も含め、感想や 質問の時間になりました。

最後に「アメーバになってみましょう」と、アメーバはどんなものかとイメージしながら、自由に床を這ったり、壁に張り付いたり、触れる感じを楽しむ活動をしばらくし、最後は全体でシェアリングをしました。







(7) 06.12.22. ダンス2 他者と向き合う 講師 岩下徹氏

柔軟体操のあと、前回の振り返りと感想を言い合い、 上半身ブラブラで体をゆるめるアメーバになり体が液体 になる感じを経験します。そして、柔らかい体から寝返 り、床にねそべり体をゆすり、先生の合図で止め、何か が芽生えるイメージでゆっくり立ち上がります。水の入っ た洗面器を頭にのせているイメージでまっすぐ歩くこと や、ペアの一人が寝て相手が身体各部をゆする《ねにょろ》 をし、またペアで立ち、一人が《空気のお人形》となり、 相手がゆすると、お人形が反応し、相互に力が伝わると いったことを行ないました。

一人で行なう体験もいろいろあったのですが、凄く面白かったのは、何かが芽生えていくことをイメージして、ゆっくりかがんでいる姿勢や寝ている姿勢から立ち上がっていく動きでした。本当にゆっくりしたペースで、最後の方はたしか14分かかっていたと思います。

それから《ねにょろ》と《空気のお人形》というのも、 かなり面白い身体をもちいたコミュニケーションの体験 でした。





《ねにょろ》(上図)と《空気のお人形》(下図)







(8) 07.1.12. まとめ・振り返り 講師 佐藤仁美氏・井上ウィマラ氏

最後はまとめと振り返りです。言語と体を使い、教室 全体にコラージュをするように展開されていきました。

まずコーディネーターと講師のコメントにつづき、全 員輪になり手の感触を大事にしながら繋ぎ、握る、隣の 人の肩をもみ、リラックスしたら円座になり、心と体に ついて体験したイメージを紙に書き、書き終わった人か らそれを床においていきました。参加者のなかには紙を ちぎり、長い紐上に繋げるようにおく、人形をおく等、 床を台紙にみたてた自由なコラージュの展開となりました。その後、それらを眺め、自分が強調したいものの前に立ち、一言ずつこれまでのセッションの感想を共有しました。まとめのセレモニーとして、順番に各自、折り紙の花を持ち、風のように教室に入ってきて、床におかれた「愛」の字のところでメッセージを言い、お花を次の人に渡し、最後に部屋のブラインドを上にあげ、現実に戻るということをして、懇親会に繋げました。



上図:折り紙の花



2007年度は、2006年度と違いタイトルに「アートで」という言葉が入り、表現アートセラピストの先生にメインで授業を担当していただきました。2006年度との変更点は、一回の時間が3時間にのび、セッション数は少なくなりました。一人の先生がつぎつぎに多様なアート表現を促し、身体を使うムーブメントも含むなど、いろいろと展開する形だったと思います。

2007年度 「アートで体をひらく、心をひらく」

「これまでの大学教育にはない講座として、身体を積極的に、発声、呼吸、ムーブメント、コラージュ、造形など多様なアート体験と表現を通過させることで、その身体をほぐし、身体と心を柔らかくつなぎ、新たな気づきの醸成を試みます。また、それらの試みを通して自己理解や成長をうながし、日々の学習や生活の営みに活かせる授業をめざします。」[チラシより]

参加者:学生、教職員、学外の教員等

場所:来往舎大会議室とシンポジウムスペース

時間:16時半~19時半、3時間×4回



(1) 07.11.14. 2007 年度基盤研究 身体知プロジェクト: ~ Learning Through the Arts ~公開授業

講師 Kate Eccles 氏、Colleen Lanki 氏(カナダ王立音楽院)

参加者:塾内8名、塾外19名+コーディネーター2名 第一回は、「アートをしながら授業で学ぶ」というタイトルで公開授業のかたちを取りました。チラシには、「教科目の教育に、アーティストと教師が協同で、音楽、美術、ダンス、ドラマ等のアート表現を子供達に体験させる、カナダ生まれの新しい授業方法、その理論的背景(ガードナーの多次元知能や脳科学)や成果の講義と、宇宙をめぐる、身体表現を多用した模擬授業」と書かれております。逐次通訳つきで行われ27名が、学内外から参加されました。

2007 年度の第一回授業の第一部の実際の講演タイトルは、A Worldwide Force in Educational Innovation: Learning Through the Arts, Imagination and the Arts、つまり「教育的革新における世界的力:アートを通して学ぶ、想像力とアート」です。エクレス先生による、教師とアーティストが共同で小学生や中学生にアートを用いた学習を実践している新しいカナダの動き、その授業の理論的な背景や、その効果、方法、それが教育以外に、またカナダのみならず世界に広がっている現状についての熱い講演でした。

第二部は模擬授業で、自身パーフォーミングアーティストであるランキ先生の、素晴らしいファシリィテーションによるものです。参加者全員で、宇宙の授業を、身体表現を多用しての、LTTA(Learning Through the Arts)らしい学び方での実習でした。例えばグループごとに天王星や太陽などの天体を体のムーブメントであらわし、見ている人達にあててもらうなど、参加者全員が小学3年生になったつもりで体験しました。皆さん楽しみながら興味津々の参加ぶりで、授業後の質疑応答も、具体的な授業のやり方や、LTTAの授業の評価、困った動きをする子どもたちの扱い、運営上の金銭的問題、教師とアーティストとのコラボレーションの仕方など、活発かつ多岐にわたりました。

*詳しくは CLA アーカイブ 12「2007 年度基盤研究 身体知プロジェクト アートをしながら授業で学ぶ?!」参照のこと。

(2) 07.11.30. アート表現を通じての心身の癒しと成長パート1~他者と向き合う、他者とコミュニケート~ 講師 小野京子氏(表現アートセラピー研究所代表) 参加者:塾内3名、塾外11名+コーディネーター3名

(2) と(3) のセッションは、小野先生がファシリテーター(促進者)として参加してくださいました。(2) がどちらかというと「他者と向き合う、あるいは他者とコミュニケートする」というもので、次のセッションが「自分と向き合う、自分の中に」というテーマでした。最初に表現アートセラピーについての解説から始まり、その後は体を柔らかにし、互いをちょっと知り合うウォーミングアップを行ないます。部屋全体を歩きながらひじやひざで触れて挨拶し、次に今日の心や体の調子を感じて、教室のなかで立つ位置を違えたり、誕生日順に一列に並んでみるなどをしてから4グループをつくりました。

グループで順番を決め、共通の台紙のうえに一度に 一人が一つずつ粘土をこねて作品をおき、グループご とにいくつもの粘土作品を作りました。人のこねた粘 土作品にさらに手を入れる人もいました。その後この 粘土コラージュ的グループ作品全体に、各グループで タイトルを決め、感想を伝え合いました。

次に、気に入っている、あるいは気になる粘土作品をそこから一つ取り出し、自分の画用紙にのせ、この粘土がしゃべるとしたら何を言うだろうと想像し、それを字に書いたり、詩にしたり、絵を描いたりし、ペアになってその感想を言い合います。そして、粘土、字と絵の作品を全部並べ、御互い鑑賞したあと、円座になって感想を言い合うという流れでした。







粘土が喋るとしたら…





(3) 07.12.10. アート表現を通じての心身の癒しと成長パート2~自分と向きあう、自分のなかに~

講師 小野京子氏

参加者:塾内3名、塾外10名+コーディネーター2名3回目のセッションも同じような流れで、ウォーミングアップから始まったのですが、このセッションでは自分にフォーカスをあてたテーマで、さまざまなアート表現を、一人、ペア、グループ、また全体で行う、そして感想をシェアする体験をしました。最初はクレヨンを用いて、利き手と逆の手で最近の楽しいことを思いながら、色、線で表現します。次に、最近悩んでいる、困っていることがあればどんな感じか、さらにそれがどんなふうになったらいいか、自分がこんなふうに今の悩みが解決できたり、糸口がつかめたらいいな、ということを、それぞれクレヨンで自由に描きました。

次に、それら3枚の絵を床にならべ、一人ひとりムーブメントで表現しました。さらに一枚気になる、または気にいったものをえらび、ペアの相手がムーブメントで表現するのを自分は観察者になり、見ることをお互いに行ないあい、終わったらその都度お互い感想を言い合いました。その後、4人1組になり、一人が音楽に合わせ自由に踊り、ムーブメントをリードすると、後の3人はそれをそっくり真似るということをし、やはり感想を言い合いました。

最後に、「自分は何だろう、こんな自分なのかな」というテーマで、それをムーブメントで一人たっぷり8分間演じました。ペアの相手はじっくり見守り観察し、そのあと感想を伝え合い、つぎに役割を交換しました。最後に円座になり、全体でのシェアリングをしました。





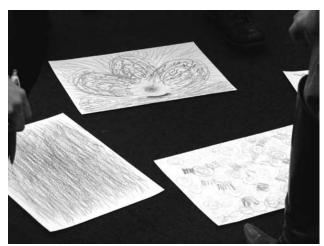


(4) 08.1.16. まとめ・振り返り

講師 小野京子氏

参加者:塾内4名、塾外8名+コーディネーター2名 最後の振り返りセッションでも、やはり言語表現と、 クレヨンで描く手法を使いながら、一人ワーク、グルー プワーク、みんなでのシェアリングというやり方でした。

プワーク、みんなでのシェアリングというやり方でした。 ウォーミングアップの後、一人ひとり自分の利き手と 逆の手で、「自分の心、今の気持ち」を画用紙に描き、 さらに、そこから浮かぶ3つの言葉を紙の裏に書きまし た。そして、グループにわかれ、絵を見ての感想を言い 合いました。次にグループで、これまでのセッションを 振り返り気になったこと、感想を言い合ったあと、一人 3 つずつキーワードを紙に書き、そのうちの一つを小さ な紙に書いて、講師の小野先生に渡しました。それらが 入っている袋のなかから、各自おみくじ式に一枚をひき ました。その後全員が円座になり全体で振り返り、印象 にのこったこと、どんな言葉をひいたのか、それについ ての想い、授業で嫌だったことなど、自由に各自発言し ていきました。この日が初めての参加者の方にも発言し ていただき、講師も感想を述べてまとめを終わりました。 その後は持ち寄った食べ物と飲み物で、懇親会を開き、 いつまでも話のつきない楽しい時間となりました。



Ⅱ. 実験授業の意義と考察

どんな体験であり、どんな学びがあったか、「学びの形態」 とは~心理学やコミュニケーションの視点から~

ここまでは、事実を中心に実験授業でどういうことを してきたのかを、2年分についてお話しましたが、ここ からは、私なりに、参加した人間として、この授業でど んなことが心理的、あるいは、コミュニケーションのレ ベルで起こり、どんな意味があったかを分析し、考えて いきたいと思います。

1. 実験授業の特徴をとらえる際の次元、あるいは軸?

まず、実験授業で何が行われ、起こっていたかをイメージすると、いくつか鍵になる言葉や、軸、次元が浮かんでくるのですね。図示すると以下のようになります。

<プロセス>

<体、心、頭> <時間軸:過去、現在、未来>

<個別性と共同性> <<アート・表現>> <拡散と統合>

<空間軸:自分、他者、世界> < 場 >

やはり一番上にある<プロセス>がすごく大事です。何かのプロセスが動いていて、それが図の一番下にある
<場>によって支えられていたのですね。<場>はゲス
ト講師のファシリテーターの方や、私たちコーディネーター、それから参加者の皆さんがつくる、何ともいえないもので、最初はぎこちなく、緊張しています。けれど、だんだん落ち着けるいい場がつくられていきます。その中で、<体と心と頭>が働いていたのですが、比較的、体と心が中心でいろいろなことを経験し、頭の働きに繋がり良い刺激をおよぼしていたのかなと思います。つまり、三つが統合されるということを体験したのかなということです。

図の中央には<<アート・表現>>とありますが、ここはむしろ呼吸とアートと表現ですね。表現には身体表現もあるし、アートも入りますし、活動というか、授業のコンテンツとしてはそういうことをしたということです。その体験の仕方に多様な側面があり、それは空間軸と時間軸とがまずあります。<空間軸:自分、他者、世界>では、広い部屋のなかで、一人作業もあれば、ペアやグループや全体で、他者と関わり、物や世界と関わり、<時間軸:過去、現在、未来>とあるように、今ここでの現在の気持に焦点をあてることから、将来や、過去に想いを馳せたり、あるいはそれぞれ自分や他者、世界とのかかわり方に気づくような時間やプロセスが働いていたのでしょうか。そうした多層的な体験だったかと思います。

またやっていたことの内容や作業には、各セッションの 概要からお分かりいただいたように、参加型ワークショッ プの授業に特徴的な<個別性と共同性>が作用していま した。またそれとも関連しますが、参加者個人の内的、 外的作業のレベルでも、各授業全体の仕組みや流れのレ ベルでも、<拡散と統合>という、二つの相反する志向 性を体験し、またそれができるように授業が構成されて いたのかなと感じています。呼吸、ムーブメントなどの 身体表現、アート表現においても、自由に呼吸、エネル ギー、想いを伸びやかに表現、発散していく面と、同時 に、あるいはその後に、そうして散らばっていったものを ひとつにまとめる面があったように思います。ちらばった 体験を、短いことばや、イメージでまとめたり、グルー プでつくった粘土作品群に題名をつけたり、クラス全体 で感想を言い合うということです。それは同時に、自分 のなかでごちゃごちゃのままでなく、何かがある種しっ かりとおさまっていく体験でもあったように思います。

2.「ひらく」に注目して実験授業体験を考察する

次に、二年度にわたる実験授業のタイトルが「ひらく」ですので、この動詞の「ひらく」に象徴される体験をしたのかなと思うので、これをキーワードに考えていきたいと思います。

何に「ひらく」のか

閉じている状態を連想させるる言葉は、固・守・緊です が、こうした漢字でいうと固くなっていて、ディフェン シブに、自分を守る、緊張感があります。「ひらく」の 漢字は「開く」「啓く」「拓く」とありますね。多様な「ひ らく」体験が、授業がうまくいった場合にはあったかな と。何にひらかれているのかということですが。 第一 に自分を感じ、表現することに対して。それも身体や、 言語や非言語、意識や無意識のレベルで、感じ、表現す ることに「ひらかれる」こと。第二に、何か知らない体 験したことのない未知の世界に「ひらかれて」いく。そ れは自分の感覚、体感、感情、認識に「ひらかれていく」 ことでしょうか。もちろん、第一とも重なっていますね。 また第三は、これも第二とやはり重なるのですが、自分 の可能性や潜在性に「ひらかれて」いく。自分の気づか なかった欲求や、夢もふくめて可能性、潜在性に「ひら かれて」いく。それは、柔軟に、プロセスや流れ、場に 心身を「ひらき」ゆだねていくことだと思います。そし てそういうひらかれていく体験には、いろいろな感情が ともない、身体も反応しますが、驚きや不安、またその 逆にリラックスした状態に「ひらかれて」いったのかな と思います。これが第四です。

もちろん「ひらく」には、人により時間の差があり、 また、うまく「ひらける」ような安全な環境をつくれた かも、各セッション等でいろいろだったと思います。



手塚千鶴子氏

ではなぜ「ひらかれて」いくのか

この条件は3つあるのではないでしょうか。第一に信頼感、安全感のある場とルールの存在は大切です。そこで無理しないでよい、いやなら体験をパスできる、互いに作品やダンスをしても、分析・評価しないことがあります。第二にセッションでうまくプロセスが流れていくようなファシリテーションが大事です。そのために素晴らしいゲスト講師をおよびしたわけですね。そして第三に、こうした実験授業の構成についていえば、授業のコンテンツや素材(呼吸、ムーブメント・ダンス、粘土、絵、コラージュ、連歌等)の選び方や、その組み合わせ方、その順番などもあったのではないでしょうか。

この「ひらかれる」体験を言い直してみると、従来の 大学の授業で体験しにくいような、何か変化を招じ入れ る体験だったのかなと、そんなふうに感じました。

「ひらかれる」体験とは、変化を招じいれる体験

それはどんなレベルでどんな変化だったのかというと、動詞で表現すると、第一に「つながる」「触れる」体験だったのかなと思います。心・体・頭と、喜び・痛み・傷と、問題や課題と、自分・他者・世界と、未知の自分・潜在力・創造性と、過去・現在・未来とですね。また第二に、「腑に落ちる」、「合点がいく」体験だったかな。これは、心、体、頭とすべてがつながる感じです。第三に「気付く」体験。今までと違った見方で俯瞰的に見られたり、とらえ直しをしたり、発見したりという体験であったのでしょうか。第四に「味わう」、「たゆたう」体験で、そこに浮いていられるような、自己治癒的で楽しく、心地よい体験でなかったでしょうか。また第五に呼吸も、アメーバになることも、粘土で遊ぶ、作品を作る体験などは、何か「原初にかえる」ような体験だったのかと思います。

3. 何を「学んだ」といえるのか Learn to how to learn

何を学んだといえるのか考えてみると、一番明らかなのは、何かの知識やコンテンツ自身を学んだのではなく、いろいろな体験を通して、Learn to how to learn ということを学んだのではないかということです。「どのように

自分や他者、世界に、触れる、つながるのか」、「どのように自分や他者、世界を受け入れ、大事にするのか」「どのように場やプロセスの力を信じていくのか」、そして「個別的な自分でありながら他者とある場を共有していくのか」、「どのように自分のなかに全体性・統合性を獲得、回復するのか」を学んだといえたらいいなと思っています。全員がこれらすべてをではないですが、あるいは、こうした学びの感覚の端著を感じとってくれていたら嬉しいと思います。

自分の中でばらばらだったもの、頭と体と心の場合も あるでしょうし、認識、思考、感情、感覚など、いろい ろだと思いますが、それらが全体性を取り戻すそのやり 方の一端を学んだのでは、という印象をもっています。

4. どのような「学びの形態」であったか

授業の「学びの形態」というのは、第一に心理教育的 科目、学生参加、体験重視型のワークショップ形式でし た。ペアやトリオやグループの活動が多く、頭だけでな くて体と心が活発に動くような、あるいは自然に動いて くるような体験であり、遊び心が発揮できる学びであっ たかと思います。第二に、コンテンツよりも、むしプロ セス重視の「学びの形態」だったということです。第三 にアナログ的で、脳でいうと、右脳中心の活動が多かっ たかと思います。分析的な部分よりはということです。 また第四に、コラージュと連句の使い方に一番端的に表 れたと思いますが、非言語的アプローチと、言語化する アプローチが、相互補完的に行われる学びの形態であっ たということです。そして第五にこれは、すでに冒頭で お話ししましたが、拡散・ちらばりへの動きと、統合・ま とまりへの動きが有機的に働くような学びの形態であっ たかと思います。一人ひとりが自由に演じ表現する部分 と、それが場のなかで全体としてまとまっていくような 構成があったように思います。また自分自身の中でも、 例えば表現アートセラピーのように、次々といろいろな モードのアート表現を連続することで、自分のなかにボ ンヤリ散らばっていた想いや感じが、つながって行き、 最後にはこういうことだったんだというような感覚がも てたり、はっと気付いたり、収まる、まとまるというこ

とがあったように思います。散らばっていく動きと統合 していく動きが、一人の人の中でも、あるいはそのセッ ション、場全体でもあったかのではという印象です。

Ⅲ. 身体知実験授業の理論的背景として

この実験授業の枠組みは、理論的背景にもとづいて作られたのではありませんが、実は、以下のような理論的枠組みを考えると、この授業の特徴がわかりやすくなるのではと思います。

大きくわけて、以下の3つに分けられるのですが、第一は、人間の認識の仕方、世界や自分の捉え方に、二つの対照的なモードがあるというのですが、実験授業では、かなりの部分、受容モードを使うようにしていたのではないでしょうか。第二の理論的枠組みは、これは2007年度の第一回の公開授業でのLTTAの背景にある、新しい考えやパラダイムのいくつかの内の1つです。第三にあげられるのは、南山大学のグラバア俊子先生の主張されている体、心、頭これらの三つの叡智の間で、それぞればらばらのままでなくうまく連関ができていくことが、大事だという考え方です。この授業も、まさにそうした連関、循環の大切さを感じながら、それを育むことを目指した授業だったのではないでしょうか。

1. 対象·客観モード(Object Mode)

対 受容モード (Receptive Mode)

環境に働きかけるモード	環境から受け止めるモード
世界は対象	世界はプロセス
分析的、論理的	直感的、感覚的、ファンタジー
過去·未来	現在
左脳優位	右脳優位
言語	音楽、美術、詩

from Arthur J. Deikman' "The Observing Self"

2. LTTA の考えの背景にあるもの (Kate Eccles の講演より)

- ・還元主義に対し、全体性思考、ホーリズム
- ・すべては、分かちがたい統一や全体の部分である

- ・部分やものは常にプロセスのなかにあり、すべてが つながっている
- ・ハワード·ガードナーの多次元知能 (8 から 12 種類) 数学的論理的―言語的―身体的―視覚空間的―
- 一音楽的一博物学的一対人的一対自的一

3. グラバア俊子の、体、心、頭、三つの叡智

- ・頭の叡智だけでの知識詰め込み型の教育は人やもの にかかわる感受性を育てられない
- ・体→心→頭という下からの知恵を大事にする教育の 必要性

(グラバア俊子「感受性と癒し―からだの叡智・こころの叡智」小泉博一・吉田直子編『現代のエスプリ no. 413』至文堂、2001年)

少し話が長くなりましたが、以上です。

横山 この2年間の授業の内容を手塚千鶴子先生が非常にわかりやすくまとめてくださったことに感謝します。 実は私もこの2年間の実験授業すべてに出られたわけではありません。ですから授業の内容についてもう一度おさらいできただけでなく、欠席した部分を補っていただけて、大変よかったと思います。

のちほど熊倉敬聡先生から、この実験授業を大学の教育カリキュラムの中に取り入れていくという具体的な問題に関して話していただくことになると思いますので、私からは、なぜ今「身体知」が必要なのか、という観点と、ほかの「知」との関わりというか、現行の教育現場でこの身体知の観念をどのように植え付けて発展させていけるのかということについて、自分の問題意識を中心にお話ししたいと思います。

倫理的な生き方— ethical living

今回の実験授業の特徴は、さまざまな受講生の方々が 集まったということでしょう。今日も出席して下さって いる A 先生のように小学校で教えておられる先生もい らっしゃいますし、学生の方、社会人の方もいらっしゃ います。さまざまな方々が「身体知」に興味を持ってくださっている。その理由は、ただの興味だけではないでしょう。ジャーナリズムのなせる技かもしれないけれども、今の社会では、1つの言葉が浮上してきている。いわゆる「エシカルに生きる」、ethical living というやつです。日本語でいうと「倫理的な生き方」ということになるのでしょうか。かなり堅い表現ですけれども。

例えば、先日放送大学の授業を見ていたら、「技術倫理」という課題が語られていました。詳しい科目内容は、佐藤仁美先生がお詳しいかもしれませんが、物を作るという行為は、単なる技術ではなく、できたものがどうやって人に使われて、使われる過程でどういう事故が起こりうるのか、ということまで想定することだ、というのです。そのような想像力がないと、真の創造はない。現実の事故はただ、管理者の責任ではないのだと。つまり、我々は社会の歯車の1つにしかすぎない、という考え方はするな、ということです。まあ、言われてみれば、歯車の1つが狂うと機械全体の動きが狂ってしまうというリスク・マネージメントを最小単位から行っていこうということでしょう。

もちろん、倫理的な生き方の中には、昨今の環境問題が含まれています。つまり、倫理的な生き方の定義とは、思考する人間として、生物の、あるいは地球市民のヒトとしてどのように他との関連と協力の下によりよく生きるか、ということになるのでしょうか。

思考する人間として、地球市民の義務感を持つということと、生物のヒトとしてほかとの平等性を保つということは、ある意味では背反する行為かもしれませんが、この2つのバランスを考えなくてはならない。私たちの身体というものも、このバランスの中に位置しているのでしょう。そして、このことを意識せざるを得ないのは、おそらく1つの危機感というものを、私たちが突きつけられているからだと思うのです。つまり、人間としてもヒトとしても非常にまずい状態に私たちがいる、ということです。そこでことさら「倫理的」などということばを持ち出さなくてはならないのです。

想像力と五感の危機

ただし、このときに立ちはだかる大きな問題は、ここ

でもやはり「想像力」です。私たちの置かれている立場は、かなりまずい、と言っても、どうまずいのか、ということは、とりあえず想像力を働かさないと絶対に分からない。しかし、危機感を理解するだけの想像力は、すでにもう文字の世界の中だけで想起させようと思っても無理なのです。それなのに、世の中はこの危機感の体感を逆にどうにかして阻止しようと必死です。非常に矛盾している。

例えば、腐った物を食べるとおなかをこわす、といっても、腐った物の味や食感が分からなければだめでしょう。つまり、味覚や視覚や嗅覚や聴覚や触覚、この五感がきちんと作用していないと、我々は身の危険を感知することはできません。

ただし、抗菌グッズが出回ったり、やたらと賞味期限にうるさくなったりすると、危険を感知する機会そのものが、そのすでにずっと手前でストップされてしまっている。ちょっと古くなったものを食べてみて、「あれ、おかしいな」という体験すらないまま、言語の世界だけで、あるいはバーチャルな世界の中で、リアリティーを欠いたまま疑似体験していく、あるいは経験したつもりになる、というのが今の時代なのだと思うんです。そのため最近話題になっている冷凍食品ではないけれど、本当に毒が入ったものでも「こんなものなのかな」と食べてしまって取り返しのつかないことになってしまう。

これはもう 1985 年にミシェル・セールが『五感―混合体の哲学』 (Michel Serres, *Les Cinq Sens*, Grasset, 1985) の中ではっきり言っていることですが、感覚世界がだめになると、文明はだめになる、と。20 年後に私たちは慌ててセールの言っていたことを後追いして、その危機感を云々しているのだと思うのです。

そして経験を通過した後でも想像力がないと、おそらく私たちは過去、現在、未来をつなげることができない。つまり過去の痛い経験から、現状を把握して、未来を想像・創造するということです。先ほど手塚先生がおっしゃっていたことと関係していると思うのですが、想像力というものは単に言語や、思考だけではなく、おそらくこの五感とつながらない限りはだめだということです。



横山千晶氏

教育現場での危機

当然大学の授業でも一緒で、こちらも危機的状況です。 今の情報化社会を見ると分かるように、情報一つ一つの 真偽を、時間をかけて検証できれば、とてもいいんだけ れども、とてもそんな時間はない。毎日すごい量の情報 が入ってくるし、ワン・クリックで、目の前の画面にこ れだけのものがわっと出てきてしまう。

昔は図書館へ行って調べて、そこで得ただけの情報、ある意味でそれだけの世界で済んでいたものが、ボタン1つ押すだけで、いろいろな情報が画面に、目の前に現れてくる状態ですので、選択はできても真偽を検証する時間がない。これは非常に危険なことです。そこで無理してでも現地や現状を調査したり、聞き取りを行ったりという身体を使った検証を、座ったままの状態の中に取り入れていくことが、非常に重要になってくる。まさに「無理をしてでも」です。

つまり座学の中に、どうやって身体知というもの、例 えばここで私たちがやってきたものを応用させていく か、身体知を従来型の知の世界にどのようにつなげてい くかということは、いまだに私には分かりません。ここ が大きなミッシング・リンクであり、教育の中では非常 に重要な課題になると思います。ただ、おそらくこの課 題に取り組まなくては絶対にだめだと思うのは、先ほ ど手塚先生に配布資料としていただいた栗原彬・佐藤 学「プロムナード・身体をめぐる断章」(栗原彬・小森 陽一他編『越境する知1身体:よみがえる』、東京大学 出版会、2000 年)の中に出てきます。オウム真理教の教徒の話が出てきていますね。世界を救うという強い義務感を持った人たちが、なぜ短絡的な思想に走ってしまったのか。しかも先ほどの倫理的な生き方でも触れた、機械全体が見えない単なる歯車となってしまったのか。やはりこれは「越境した」せいではないでしょうか。つまり強烈な体感を得た身体が、今まで培ってきたはずの知をなし崩しにし、かえって「制度化され」、「知を欠いた」身体となってしまったのです。これは身体を欠いた知の世界の脆弱さをも裏打ちしています。

ことばを変えれば身体で会得するという経験がない若 者たちの身体が、何らかの形で突然開かれてしまうと、 非常に危険なことになる可能性がある。つまり、今まで 言葉や思考を連ねてつなぎとめてきたさまざまな情報の 集積が、この1つの経験を通してすべてこの会得に集約 されてしまう。今度はその「会得」の危険性を私たちは 考えていかなくてはならない。教育の現場での今1つの 大きなミッシング・リンクはこの点です。

身体を交えるという経験

もう1つ、最初に言ったことですが、私たちは他者とつながることで生きています。知の世界も同じです。例えば大学の中で取り組まれている課題に、自分で考えたことをしっかりと人に伝えられる、そして意見交換が行えるという、知の基本的な能力を身に付けることがあります。アカデミック・スキルズといわれるものですね。問題を見付け出して、調べて、自分なりの解答を得て、最終的に文字化したり、プレゼンテーションしたりして、つまり体を使って他者に伝えるということです。もちろん他人に納得してもらわなくてはならない。当然そのためには自分自身をやはり開いて、伝える努力をしていかなければいけない。

つまり、意見の構築は、ある程度自分の世界の中で閉じこもって行う内向きの作業です。しかし、意見を開陳する場では、内向きになっていられない。外に向かって何かを言うということは、そこでぶつかって、そこからまた新たなものを作り上げていくという、結構しんどい作業です。これはもちろんアカデミックな世界で生きる人たちだけのスキルではなく、生きるためのスキルその

ものだと思います。人と「交わる」ということは「交える」ということにもなるので、衝突して怪我をする危険性を伴うものである、ということが分かっていなければいけない。必死になって作り上げた自分の意見が、ばっさりと切り捨てられることがある。これは痛いです。でもそこから立ち上がれるか。いや、ただ立ち上がるだけじゃなくてただでは転ばない、という精神で何か地面から拾い上げて立ち上がれるか。

これも「プロムナード・身体をめぐる断章」に書かれ ていたことと関係すると思いますが、交わるということ はハーモニーではない、いや、ハーモニーのときもある けれど、そこで衝突が起こるんだということは、心積も りしておいたほうがいい、ということをあらためて自覚 してもらう必要がある。これも実は身体感覚を伴ったも のです。今はアカデミック・スキルズがらみでお話しし ましたが、小さな子供たちならば、これはすぐに喧嘩に なりますね。言葉でうまく説明できないから手が出てし まう。でもボカスカ叩き合う喧嘩にも大いに意義があり ます。そこで1回身体でお互いにとことんぶつかり合わ せて、それでもう頂点まで達した後で、疲れきって、じゃ あ、頭を冷やして少し考えてみようと。あるいは、えー んと泣いた後でもいいです。とにかくカタルシスがあっ た後で、もう1回考えてみるという、そういった経験を 子供のうちに十分させておくことは大切でしょう。喧嘩 のやり方は、幼いときにこそ学んでおくべきです。

つまり、身体を交えるという経験を行わせた上で、実際に言語へと持っていくという部分を、変に回避しないことです。このステップから人は「痛み」も理解してきたし、そこからどうやって立ち直って仲直りしていくのかも学んできた。だんだんと想像力が勝ってくると今度は身体抜きで「交わる」ようになる。ただ、衝突は常に起こりうることを理解しておいたほうがいい。でもあとは同じです。言葉の世界でも人は傷つくし、殺されもする。非常に身体的なものです。しかし同じ程度にこの衝突や交わりからすばらしいものが生まれ得る。だからどうやって自分を開き、他人を受け入れていくか、ということも同時に学ばなくてはならないんですね。これも実は非常に大切な、生きていくスキルだと思います。実は戦争というのはそういったスキルを欠いた上での出来事

なのだということを覚えておく必要があります。

まとめ

今私たちがジャーナリズムの世界で、これだけお金を 使ってエシックやエコと叫んでいる事柄も、実は身体 抜きには絶対考えることができない。それらが壊れてし まった世界の危険性を体感できないことは意味がないか らです。それなのに私たちは身体性をまったく欠いた状 態で、夏は涼しく、冬は暖かく、食べ物が豊富にある安 全な生活の中でそれを考えようとしている。それでよい のか、という問題。また、既存の知の集積と、身体を通 した知は、どこかで絶対に結び付く必要がある。大学で はそのことを考えていかなくてはならない。だけどまだ その方法が私たちには分かっていない、ということ。そ してあともう1つは、知の基本である話し合う、議論す るということには、絶対に衝突の危険性が伴うというこ と。そしてどうやって衝突して、どうやって互いの意見 を認め合い、解決へと持っていったらいいのかというこ とも、実は身体知であるということなのです。

最終的に、こういった身体をめぐる問題点はさまざまな学問分野の中で、分析はされてきている。ただ、それらをしっかりと総合的な知として、私たちは結び付けていないんです。もっとも大きな課題はここになるでしょうか。そしてこれはもちろん教養というものを考える際の、基本だと思いますので、ぜひとも皆さんとディスカッションしていきたいと思っていますし、当然これは大学の中だけではなくて、人間は生まれたときからそういった知の中に生きていかざるを得ないわけですので、やはり小・中学校、高校の先生方とも一緒に話し合っていかなければいけないことだと、私は強く思っています。長くなりました。以上です。ありがとうございます。

熊倉 ありがとうございました。では続いて私の方から、 横山さんの視点とはだいぶ違って、授業の具体的な在り 方について問題提起のような形で考えてみました。まず この2年間行なってきた実験授業の(従来の授業に比較 しての)特色というお話と、やってみてどんな問題点が あったか、そして、今後できれば正規の授業にしていき たいわけですが、それに向かってどんな問題点があるか ということを、私なりに考えてみました。

実験授業の特色

- ① ご存知のように日吉キャンパスは主に1・2年生がいるキャンパスです。ですが、その1・2年という学年に縛られずに、いろいろな学年、いろいろな学部の学生がいた。そして単に学生だけではなくて、通常の学生以上のさまざまな年齢の方が授業に参加していたということです。こういうことは例えばヨーロッパやアメリカの大学ではごく普通のことなのですが、日本の大学ではご存じのように、あまり普通のことではないということを、再認識させられました。
- ② 当初は慶應内部の学生と教職員だけに募集を絞っていたんですが、結局、人集めがあまりうまくいかなかったせいもあって、ある段階で外部の方にも呼び掛けることにしました。その結果、慶應の学生・教職員でない方も、この授業に参加していただくことになりました。
- ③ 普通の授業ですと、教員の方が授業を組み立てて、学生の方はそれを受けるだけですが、この授業は主催者側の教員、あるいは場合によってはゲスト講師の方が、講師ではない回のときには、学生あるいは参加者に交じって、まったく同じ形で授業に参加していく。つまり、教員が必ずしも特権的な位置に立っていないということです。
- ④ 正規の授業ではないということもありますが、成績評価がありませんでした。
- ⑤ 授業スケジュールが変則的でした。2006年度と 2007年度で多少違いますけれども、2006年度の場合は 基本的に隔週で2時間ずつ行いました。今年度は3時間で、隔週ではないですが、いろいろな曜日にやりました。 ゲスト講師の方の都合もあり、非常に変則的な授業のスケジュールになりました。
- ⑥ 最後に、今現在やっているこの研究会です。つまり 授業全体をある種メタレベルからもう1回、学術的にき ちんと振り返る、そういう研究会を開催するというのも 特色かと思いました。

実験授業の問題点

① 各授業を映像あるいは文字として記録していたので

すが、記録者という存在、記録の仕方も含めて、問題点 となっていたのではないかという気がします。

- ② 先ほどもお話ししたように、なかなか、特に現役の学生が集まらずに大変苦労して、最終的には慶應外の方にも呼び掛けをしたということがあります。
- ③ それとの関係で、いわゆる広報にも問題があったように思います。ポスターやチラシを作ったのですが、授業のタイトル「体をひらく、心をひらく」も含めてチラシ、ポスターに載せた文言が、はたして、特に現役の学生に訴えかけるようなタイトルや文言であったか、ということがあったかと思います。
- ④ 参加者の皆さんも痛感なさったと思いますが、キャンパス内、少なくとも日吉キャンパス内には、こういう授業を行うのに適したスペースがないと改めて痛感しました。岩下さんの授業などでごろごろしたくても、なかなか気持ちよくごろごろできるような場所が、これだけ広いキャンパスなのにありません。

実験授業の正規授業化を目指す

次に、これからもし正規の授業にしていくとしたら、 どんな問題があるかということです。

- ① 日吉の場合は、1・2年生が主ですけれども、正規の授業にすると、結局 18 歳からせいぜい 20 歳、21 歳ぐらいまでの学生のみになってしまう可能性が大きい。そうなると慶應内部の学生、しかも同一年齢の学生だけになってしまう。
- ② しかし逆に、教員は、この授業のコンセプトをきちんと理解してくれていれば、参加することは可能だと思います。ただ、これももちろん原則的には慶應内部の教員のみになるでしょう。
- ③ もしあくまで通常の正規の授業として行う場合は以上のような形しかとれないですけれども、もしそうではない、あくまで今回やった実験授業のような形、つまり同一年齢ではなく、塾外の人も含めて行うということにした場合、大学の通常のルールをどう変えていけるのか、いけないのかという、大きな問題ともつながりうると思います。
- ④ 正規の授業にする場合、どうしても評価を付けなければいけない。こういう身体知の授業の場合、成績評価

をどうするか、というのも大きな問題です。

⑤ この種の授業に適したスペースが現存のキャンパスにはない。慶應が今年創立 150 年を迎える関係で、現在日吉キャンパスにも新しい校舎を建設中ですが、そこに今とりあえずは「日吉の家」と関係者の間で呼んでいるスペースが出来上がります。

実は、三田では、手塚さんなど何人かの教員と学生有志で、「三田の家」というプロジェクトをやっています。大学を外部の社会に開く一種のインターフェースとして、さまざまな実験的な授業やワークショップができるような場所を運営しているんです。それの日吉バージョンとでもいうべき「日吉の家」、つまり学生も教員も分け隔てなくカジュアルに交流し、場合によっては飲み食いまでできるような、今のところ畳敷きのようですが、そういう場所ができれば、こういう授業もやりやすいかと思います。

- ⑥ 当然この種の授業を行う場合、いろいろな精神的あるいは身体的なアクシデントが伴う可能性があります。 そうした場合の対応態勢を、やはり考えておかなければいけないと思います。日吉キャンパスでいえば、カウンセリングを行っている学生相談室、あるいは心理学教室との共同作業も必要なのではないかという気がします。
- ⑦ これは根本的な問題なのですが、そもそもこのよう



熊倉敬聡氏

な身体知の授業が学生に受け入れられるのかどうか。本当は、今の学生にはこのような授業が一番必要なのではないか、でもだからこそ逆に非常に受け入れがたいというか、心理的な抵抗感があるというか。先ほど、人が集まりにくかったと言いましたが、それは単に我々の広報の仕方に問題があったからかもしれませんが、もしかするとそういう最も受け入れ難い、最も無意識の抵抗が生まれてしまいそうなテーマだったからこそ、人が集まりにくかったという気もしています。でも、現実には人が集まらなかったら授業が成立しないので、より心理的に近づきやすい、魅力的なテーマなりタイトルなりを考える必要があるかと思います。私の方は以上です。

続けて、昨年度のゲスト講師でいらした佐藤仁美先生 と井上ウィマラ先生にコメントをいただきたいと思い ます。

佐藤 実は資料を何も用意していません。その場で浮かび上がってくるイメージの言葉でお話をさせていただこうかと思って参りました。

私は初年の2006年に、手塚先生からお声かけいただきました。最初に"身体知"とうかがった時、いったい何が起こるんだろうか…というのが、私の印象でした。何度か手塚先生とメールのやりとりをさせていただきまして、お会いしてお話をうかがっていくうちに、私の役割は何だろうか…というのが、じわじわと分かってきたような気がします。

伝えることの難しさ

私は、言葉で表現するのには、結構難しいことを扱う、セラピー等をしてきています。子どもたちには一子どもだけではなく大人もそうなんですけれども一自分が思っていることを言葉にして人に伝えることが難しいのです。そのあたりは私自身も、自分の生きてきたこれまでというのをふり返ってみると、相手に勘違いされてしまったり、自分がこう思っているというふうに表現しようと思っても、語彙不足や表現不足から、相手との行き違い、そこからいさかいが始まったりと、トラブルが起こることが多かったというのは、すごく感じてきました。

今、そういう人たちと向き合っていくのが、私の臨床 心理士としての仕事ではあるんですが、もう1つ、私自 身の将来設計の中でやるはずではなかった教員というも のを6年前からすることになって、その時また、相手に ものを伝えるということの難しさを、さらに体験するこ とになりました。こういう、ものを教えなければならな い(伝えなければならない)となったときに、それを言 葉でまずは伝えていかなければならないんですが、その 言葉の多意味性、その人が生きてきた経験や価値観など、 そういうものが全部入ってくると、同じ言葉を発しても、 このあたりの方はすごくプラスの意味に取ってくれてい ても、こちらの方はものすごく否定的な意味に取ってい たりと、本当にいろいろな反応が返ってくるのを体験し たときに、自分でも言葉を一生懸命磨かなければいけな いというのを、すごく感じてきました。

そういうのをずっと疑問に思っていながら、その流れの中でこの身体知というものに出会って、私は大きな課題を目の前にぼんと置かれた気がして、実を言うとお引き受けするときにすごく葛藤したんです。

手塚 無理やりひっぱりましたかしら (笑)。

佐藤 無理やり…というのではなくて、これは与えられたよい機会だからと思ったのです。だから、私は自分のためにもお引き受けさせていただいたというのが、実はあります。その中で何を還元できるのかというと、私がずっと出会ってきたトラブルなどのことが、もしかしたら解決のキーワードになるのではないかと思えたところが、お引き受けしたときの大きな第一歩だったかと思います。ですから、先生方にも結構ご迷惑おかけしてきたなと思って、本当にお世話になってきました。ありがとうございます。

私は前に出るのもすごく苦手で、今こうしてしゃべっているのも緊張しています。人前でしゃべるのが苦手なので、授業を展開すること自体も、自分の中ではかなりテンションを上げていかないとできないようなところもあるんです。



佐藤仁美氏

では、なぜここまでやってこられたのかと思ったときには、まず1つは、自分のセッションに入る前に、観察者をさせていただいたということだったんです。先ほど、場のことをたくさん先生方から話題を出してくださっていたと思うのですが、私は講師の立場と参加者の立場と、それから観察者、記録者の立場と、いろいろな形で今回参加させていただいたので、自分のいる場所がたくさんありました。中に入っているときと、まったく外にいるときと、この目前で起こっているところに関与観察みたいなものをしながら、ファシリテートしていく自分と、いろいろな立場が与えられたことで、いろいろな層から、いろいろな形で皆様とやりとりができたのかと思っています。

共振することと場にいること

先ほど、熊倉先生が、この実験授業の問題点のところで、記録者の存在ということをおっしゃっていましたが、私はまさにその記録者でもあったわけです。もし私が実際に参加していて、外から見られている、観察されていると思うと、すごくやりにくいという気持ちがあるんですが、そのやりにくい原因を作っているところ(立場)を自分がやっていくという体験を、2006年にさせていただきました。このとき、どこに私はいたらいいのだろうかと、すごく迷ったのです。

2つのビデオカメラが動いていて、私がどこにいたら、 邪魔にならないようにビデオが撮影でき、講師の先生も 思うように授業を展開でき、皆さんも緊張しないで普通に自分を出せるか…。だけど私もあまり隠れてしまうと、皆さんが見えないので記録ができない。最初は柱の陰に隠れようかといろいろ考えたんですが、井上先生の授業にしても、スペースを全部使われる。壁が素材になったりするときもあったかと思います。床も素材になっていく。触れるというときに、結構人を触りに来る方もいらっしゃったので、私もその素材のひとつになっているのかと…そういうこともありました。

記録者として、確かに外側から見ていなければいけないのですが、でもそこに1人の参加者としているというような自分の感覚でいることが、やはりこれは一番いいのかな…というふうに、途中からですが、思うようになりました。

そうすると、この会をずっと先生方が構成されてきた中に、大きく分けてファシリテーターというか講師の方がいらっしゃって、もちろんこの会のリーダーということで、先生方がコーディネーターをしてくださって、そこにいらっしゃって、参加者がいらっしゃる。去年は確か記録者と観察者と二人いました。今年は一人だったかと思うのですが、二人いると役割分担をすることができます。この場合、目が2つ(4つ)あって非常に楽です。一人の方に、時系列にどんどん、あったことをすべて書いていくという役割をしていただき、そこに私がコメントを差していくというやり方で進めていきました。

手塚 分担して。

佐藤 はい。それは私には、すごく勉強になったなと感じています。今年度はその両方の役割を一度にさせていただいて、一人2役ということで結構大変だと思いました。どちらかというと私も体で感じてしまうことが多いので、中で起こっていることが自分の中で揺れていくのです。

手塚 共振ということですね。

佐藤 共振していく。たぶん私は、自分のセラピーの形は、共(とも)振(ぶ)れしながら言葉でやらなくても、身体や見えないところで動いて一緒になっていくという、そういうタイプのセラピストかと思っているので、観察者になっていても中に入っていってしまいます。そこが少し、主観と客観の使い分けというところが難しかったのですが、自分の中の関与観察を育てるという意味では、すごくいい体験でした。

そのなかで何を考えていたかというと、私は実は身体 知用ノートというのを作っていまして、今日持ってきているんですけれども、ずっと記録を書いていました。自 分の体の動きと、自分の心の動き、頭の動き。メモを取りながら、その観察をしながら、あるいは自分のセッションをやってみて、どういう言葉がここに出てくるのだろうかというのを、2006年の9月からずっと書いてきました。今、それを眺めてみると自分のコメントはすごく恥ずかしいのですが、そのとき感じたことが全部書いてあります。やはりヒントとしては、私は観察者でありながらも自分に問いかけていたし、自分から何かを発して、誰かに問いかけていたのかと思うと、皆さんはもっとこの中で自分に問いかけ、他者に問いかけて、という作業をしていたのだろうと思いました。

空気の流れや、その雰囲気というのがその回、その回で動いていく姿をずっと見させていただきましたが、それは結局"場"です。場というものがいろいろな色合いで、いろいろな重さで動いてゆくというのを感じました。その中で皆さんが、このときはこの方がすごく発揮している、また、別の回ではこの方が何か沈んでしまったなと、そういうのを、個人も見ているんですが全体を見ているし、個人と自分というものも見ているのです。

では、何でこれができたのだろうかと思ったときに、 やはりその場をつくっていくのは人なのです。先生方が 最初から考えてこられた、その意思や気持ちなど、そう いうものがとても大きく、先生方の身体知がここに反映 されて、温かく包み、枠組みをつくり、構造を作り、見 守っているからこそ、これが展開できたのだろうという ふうに感じることができました。

身体知から学んだこと

もう1つ、私のノートを見ますと、"身体知から学ん

だこと"というのがあります。前回の授業(2008年1月16日のセッション)が終わったときに、考えなければではなくて、自由連想的にぱっと書いた、そのとき出てきた私の言葉を紹介します。

「統合性と統合力」、「結び付き」、「つながり」、「感情の遠近法」、「バランス」、「心のバランス」。「自らに問いかけるという中に、自らの心に問いかけて、頭に問いかけて、体に問いかける」。「相手に問いかけるという中にも、相手の心に、相手の頭に、相手の体に…」、ということがずっとされてきたな、と。

それはどうやって映し出されてきたかといったら、最初の方のキーワードでミラーリング(ペアで、一人が自由に動き、相手がその動きを鏡のようにまねをすること)という言葉があったと思うんですが、やはり自分の鏡であるし、相手の鏡というところにそれが出てきたし、例えばそれがパフォーマンスとしての体であったり言葉であったり、私の場合はコラージュと連句を使わせていただいたんですけれども、そういうものに表れてくる。すべてやったもの、やっていることは、常に問いかけ合っている。またスペース全体が鏡となっていて、私は本当にここは『鏡(かがみ)の間(ま)』だなと思いました。やはりカウンセリングの中でも鏡というのはすごくキーワードになっているので、そういうものをすごく感じさせてもらったと思っています。

パフォーマンス自体のことも少しだけお話ししたいと思います。例えば、井上先生や岩下先生のセッションでは、呼吸や体が使われていたというのが、時間とともに流れていきました。自分の中で変わっていくというのが、そのときその場で身体のパフォーマンスとして時々刻々と変わって見えてくる。私は観察者として外側から、皆さんがふにゃっとなっていく姿、ほぐれていく様子、ひらかれていくプロセスというのを見せてもらったときに、それが映像(ビデオ記録)としては残っているんですけれども、過ぎ去っていってしまうと、現実には失われてしまう。そこを皆さん、どういうふうに感じているのか、その場で聞きたいんだけれど聞けないというのを感じながら、見ていたんです。

ところが、私が担当させていただいたコラージュや連 句は、プロセスは同じように残りませんが、作品(完成 あるいは達成作品)としては物が残るものをやらせていただいたんです。もし、連句も、書き取ることなどしないで、その場の詠んだ言葉のやりとりだけで展開していきますと、過ぎ去っていくとともに消えてしまうけれども、セッションではホワイトボードに書いていただいて残したんです。コラージュと連句双方とも、視覚的に残ることを一連の流れで行ったので、作品のプロセスを後からながめてみることで、再度振り返りができたわけです。フィードバックが視覚的に可能となります。

それから私は、本日も出席されている慶應大学法学部の武藤先生の2007年夏の文学実験授業にも参加させていただきました。武藤先生はとても言葉を大切に、そして巧みに使われるというところが、私は毎回毎回すごく感動したのですけれども、そこにパフォーマンスもたくさん加味されていて、ダンスの黒沢美香先生や朗読の岡摂子先生など、多彩な先生方が登場され、体で表現をされて、そこで、それこそバーチャルになりがちなところをちゃんと体に収めて、もう1回出す、また体に収めて出すといったことを広く・深く繰り返し展開されていて、ものすごい身体知だと思いました。

そして、この昨秋からの 2007 年度の実験授業につながり、私自身にとっての第 2 ラウンドになっていたかと思います。残念ながら、最初の数回は参加できなかったのですが、はじめは記録者として、最終回には参加者として参加できて、最後に内側から自分と他者、個と全体を体験できたことは、すごく大きなことでした。いろいろな立場を体験させていただいて、最終的には何をしたのかと考えると、今日まで生きてきて、自分の中で統合力をつけるということと、つなぐということと、まとめる、そのあたりなのかと思っています。ただ、それはすごく難しいことだというのを、今回感じさせていただきました。

最後にまとめの言葉とすると、この社会の雑踏の中で 自分を見失わないこと、自分が自分であって、自分でな いんだけれども、やはり自分という存在がいて、社会の 中で生きている自分というつながり、個であり、また他 の個と全体とつながっているというところを、今回はす ごく考えさせられたし、この授業自体が社会に発信して いるような、そんな印象を受けました。何かまとまりの ないお話ですみません。以上です。

熊倉 では最後に井上先生、お願いいたします。

井上 身体知の授業に関する難しさの1つは、大学の正規の授業としてどうやって取り入れるかということです。私は今、大学の中でスピリチュアルケア援助論という形ですでに授業として取り組んでいますが、その中でいろいろな確執というか葛藤が起こっています。ですから、授業に組み込んでゆく場合にどういうことが大切になるのか、どんな問題が起こりうるのか、その辺を考察してみたいと思います。

身体知授業の難しさ

まず、教員間で、こうした体験的授業について、どういう意味を持つものなのかということをしっかりと認識しておく必要があります。なぜならば、生徒がその授業の中で非常にいい体験をしたとしても、それが外に出て、ほかの先生とこういうことをやりましたというようなことが話されたときに、その先生がこうした身体知に関する体験的な授業に理解を持たなかったり、あるいはこうした体験型の授業は大学教育ではないとして放逐しようとしている人だったりすると、それによって非常に生徒にバイアスがかかってしまうことがあるのです。そういう大学政治のダイナミクスが授業に及んでくることが、非常に怖いと思います。

生徒はそういう教員間のパワーゲームに乗らされていることが分からずに踊らされてしまうこともあるので、生徒にいろいろ説明することができないことさえあります。なかには、「あんな授業は学問的に意味がない」、「お前ら、何をやらされていたんだ、気を付けろ」などということを言う人もいないわけではありません。そうすると、すごくいい、ほんわかとした雰囲気で進んできたものが、15回の授業の13回、14回ぐらいで、あれあれという形で転んでしまうこともありえるのです。そんな苦労を重ねながら、何とか授業を守り育てています。ですから、この身体知に関する授業を学内でどのように位置

付けていくかがとても重要です。他の先生たちに応援してもらえるよう、生徒にも紹介していただけるような形になってゆくといいと思います。

高野山大学での実際の授業から

高野山大学のスピリチュアルケア学科には、社会人編入する生徒がいます。例えば緩和ケア病棟で数年働いて、バーンアウトしてしまって、学び直しに来た看護師さん、保育士をしていてモンスターペアレントに悩まされた人、いろいろいます。そういう社会人編入してきた生徒たちが体験型の身体知の授業に参加して体験した感想と、18歳、19歳の新入生が体験した感想とはだいぶ違います。幸か不幸か、私の授業はそうした混合クラスですので、両方の側のコメントが聞くことができます。

実践派の人たち、つまり1回社会に出て実務経験を積み、そこで課題にぶち当たって大学に学び直しに来た人たちの感想は、こういう身体知授業をやってみると、現場で患者さんとトラブルを起こしたり、同僚や上司たちとの関係をこじらせたりした、その原因が手に取るようによく分かるようになりましたと言うことがあります。両親との関係をはじめとする自分自身の生育歴の問題が現場での問題とどれくらい深い形で結び付いていたかよく分かったということなのですが、半期でだいたい15回ほどの授業をやると、実践派の人たちはそういうことを言うようになります。

それに対して高校を出たばかりの18歳、19歳の人たちが言うのは、「先生、今までこんなに話したことがなかった」というような感想です。「授業中こんなに話していいんですか?」などと言うこともあります。だいたいそれは男の子に多いのですが、女の子にもそういう感想を抱く生徒がいます。「高校の授業でこんなに会話をしたことがなかった」とか、「人前で話すのが照れくさいから、何か先生に反発するような態度を取って悪かったけど、それぐらい照れくさかったんです」と言う生徒が、授業を数回重ねた頃から出てきます。横山先生が危機ということをおっしゃっていましたが、学生たちが、授業でも普通の生活でも、規則に縛られて本当に思っていることをコミュニケーションすることが許されてこなかったのだというのは、大きな驚きでした。

その辺を踏まえて、学年が違ったり、塾内外の人も入れていく場合に、授業についてどのように宣伝するのかも大切になってくるでしょう。

学びなおし

佐藤先生のお話にもありましたが、体験型の授業で は、同じ言葉でも、とてもプラスに取ってくれる人とマ イナスに取ってしまう人が出てきます。そういう場合に は、リアルタイムでその現象に注意を向けて、ファシリ テーションとして開いて、「あれっ、同じ言葉なのに、 A さんにはこんなによく響くのに、B さんにはネガティ ブになってしまったんですね。それはなぜでしょう? お二人のお気持ちを聞かせていただけますか?」という ふうに、その場での学びを促進する流れを作ってゆく必 要があります。そこで、たぶん衝突というか、ある意味 での自我意識による葛藤というか、これまでの自分とは 違う現象と出会って、自分と受けとめ方とは違うけれど も、そういうことがあっていいんだということを学んで もらうことになります。手塚先生の御話のなかに Learn to how to learn というのがありましたが、私は、Learn to unlearn というのも大切だと思います。学びなおすとい うことです。学びなおすためには、1回自分が学んだこ とをアンラーンすること、ほどいていくことが大切です。 それまでの自分の癖をほどくとき、つまりアンラーンす るときには、自我の不安が出てくるものですが、その不 安に寄り添うことがとても重要になります。それが、体験 学習の学びの場の安全を保障するということになります。

古い自分を手放す不安を伴う学びなおしを上手く促進するためには、安全枠として、言葉によってこれから起こることをあらかじめ説明したり定義しておくというような講義的な部分も必要です。これまで親しんできた学び方によって、ある程度の予測ができる状態を準備してあげておいて、すこしずつ身体性に触れてゆき、これまでの自分の枠をほどくときの不安に慣れてもらい、不安もあるけれども自分を開いていく喜びもある、他人とつながる喜びもあるという体験をしっかりと味わってもらう、そのさじ加減が難しいのではないかと思います。

それは、言葉以前のもやもやとした感じを言葉にする ためのスペースを提供して、大切に見守り、それぞれの 体験が言語化されたものを分かち合う時間を大切にすることでもあります。こうした体験学習の微妙なところを、こういう授業をするんですよと、先生たちの間で認識してもらってから、応援してもらえる環境を整備してから授業を展開するという学内政治のプロセスも大切かと思います。

身体に住み込むということ

私が今スピリチュアルケアの臨床として取り組んでいる現場は、死の看取りやグリーフケアと子育て支援とがあります。そこでは、心と体の問題を、魂が身体を離れてゆくときのプロセスと、魂が身体に住み込んでゆくプロセスの二つの方向から見守ることが仕事になります。

ウィニコットという精神分析家が、魂が身体に「ドゥエリング・イン(dwelling in)住み込んでいく」ということを言っています。それは生まれてから3年、あるいは5~6歳までの親子関係、育て方、見守り環境に関することです。魂が身体に住み込む過程で、赤ちゃんが身ぶりや泣き声で出すサインに親がどういうふうに答えるかによって、自分が感じたことを自分のものとして受け止めていいと思えるかどうかが決まってきます。親が子どもの状態に鈍感で自分自身の欲求や不安に心が囚われたままだと、赤ちゃんは親の欲求や不安を自分のものにしなければいけない状況になり、それが偽りの自己になってゆきます。ホンネとタテマエという見方からすると、自分のホンネがわからなくなってしまうということです。



井上ウィマラ氏

ある程度本当の自分がしっかりしていた学生が多かった時代は一旦終わってしまったのかもしれません。戦後社会の急激な変化とともに、魂がうまく身体に住み込めないという問題を抱えたまま大学に来る学生が増えて、大学教育の中でも、保育的な部分を踏まえた授業を展開しなければならない状況があるのかもしれません。そうしたときに、身体知の授業を単独で展開するのではなくて、国語の授業に組み込んでいったり、体育の授業やその他さまざまな授業に身体知を組み込んでいく必要があるのではないかと思います。

例えば慶應大学には医学部も看護学部もありますね。 医学や看護の学生たちが臨床実習に出ていくときの対人 関係のトレーニングは、まさにこの身体知の問題だと思います。だから、特に看護や医学の教育の中で、面接の 実習や対人関係の基本的なコミュニケーションのところ を担当してくださっている先生たちと話をして、この身 体知が彼らの領域ではどういう言葉で語られているの か、共感になるのか、表現になるのか、コミュニケーショ ン能力になるのかといったことを詰めてゆく必要性もあ るでしょう。

身体知に関する体験型の授業に伴う不安というのは、ある意味で自我を手放すというか、例えば、赤ちゃんや子供が思い通りにならなくなって癇癪を起こすような、「ヤダヤダ」が爆発するというか、「怒りん坊さん」になるような体験を上手く通過してきたか否かに関係しているところがあります。そういうことが小さいときからある程度許されればよかったのですが、それが許されずに育ってきた、つまり、いい子だけで育ってきた学生たちがすごく多くなってきているのだろうと思うのです。

看取りや介護をしている人たちの話を聞いても、例えば、痴呆が出てきて初めて本当の自分が出せるようになるということがあります。それまでは押し殺して生きてきた怒りや、寂しさが出せるようになります。ご婦人の場合では、それまでいかに褒められてこなかったのかが痛いほど浮かび上がってくるケースも少なくありません。女の子らしい可愛さを充分に楽しめなかった、あるいは褒められてこなかったかということです。小さなことを褒めてもらったり、可愛いねえと言ってもらうことがその人の心をどれだけ和ませるかということです。老

年期の男性の場合には、いかに心を込めて触れられ抱き 留められてこなかったかが浮かび上がることが少なくあ りません。現場では、「このエロ爺」というふうにして 処理されてしまうことが多いのですが、実はそれは小さ いころから抱き留められてこなかった、感情的な部分を 本当の意味で抱き締められていなかった寂しさなのだと いう話です。

そういう現場での話から見えてくるのは、やはり時代 の看取りということを考えた方がいいのではないかということです。介護に関わる人たちとスピリチュアルケア について話しながら思うことです。スピリチュアルケア の臨床現場ではそういう形で出ていることが、今の学生 の問題として、横山先生がおっしゃってくださった危機 という形で出ているのではないかと思うわけです。

戦争で苦労された世代や団塊の世代の人たちが、自分の身心をどのように養ってきたかという問題があります。戦後の混乱の中でよき伝統が失われ、戦争による心の傷が癒されないままに物質的再建に突っ走った状況下で子育てが行われてきました。その結果として、魂が上手く身体に住み込めなくなった世代が増えてきたという時代状況となったのではないかと思います。

物質的豊かさがバブルの崩壊で頂点を極めたあと、そうした心や魂の問題の大切さに目が行くようになってはきましたが、具体的に身体を通して為される世話のレベルで、失われてしまったものがあまりにも大きいのかもしれません。それをどうやって取り返し、創造しなおしてゆくかというテーマが身体知には含まれています。

子供にとっては、自分のそのままを許してもらうことの大切さです。自我をアンバードンする機会が適当に与えられるということです。喜びであれ、怒りであれ、重荷を下ろすというか、自我を一旦崩壊させて、わがままをすることがあり、それが許されて初めて、「自分は怒っていたんだ」、「寂しかったんだ」、「悔しかったんだ」、「嬉しかったんだ」と思えるようになります。そこからしか本当の命への思いやりや倫理観は出てこないのではないかと思います。自分の自我を手放して、わがままをさせてもらうことが許されないと、本当の感情が体験できないし、本当の自分に出会えません。怒りや破壊性が受け止められる体験からしか出てこな

い思いやりというものがあるはずなのです。

その辺の部分を授業としてどこまで取り入れられるのか。身体性に触れるということには危険なところもあります。それは、個人的なカウンセリングという枠の中でやってもうまくいくかどうか微妙な問題を、大学の授業の中でどういうふうにどこまで展開するかということです。しかし、うまくいけば、集団の力に見守られて、思っていた以上に癒やされてしまうところも確かにあると思います。そういうところをはっきりとさせて、いろいろな分野の先生たちの知恵を集めて、戦略を練って授業を準備して生徒に提供していくことが、教員と生徒の双方にとって大切なことなのではないかと感じています。

手塚 ありがとうございました。今日は参加していただいた方、それからセッションで記録を取る役割や観察する役割をしていただいた方も来ていらっしゃるので、ディスカッションのときにそういう生のご感想も含めて、報告されたことやコメントに対して、自由にディスカッションしていただければと思います。

実験授業ゲスト講師より

即興する身体

岩下徹(京都造形芸術大学客員教授)

あの授業は、今でも私のなかで非常に強い印象を残しております。時間も回数も確かに限られてはおりましたが、あの場に流れていた空気は本当に濃密だったと思います。それは、殆ど疑いも無いことですが、参加された方々の問題意識が実にはっきりとしていて、それぞれが自ら積極的に取り組んで下さったからに違いありません。このような個々の自発性、内発性(spontaneity)こそが、即興表現では何よりも尊重されます。それが無ければ即興は絶対に不可能であり、そして僅かでも他から何かを強制されたなら、その刹那それは幻の如く消え失せて仕舞います。

例えば、オノ・ヨーコ詩集『グレープフルーツ・ジュース』の「さわりなさい。」を手掛かりに即興で動いて頂いた時のこと。初めは各々身体の様々な部位で周りに在る色々な「もの」の感触を静かに味わっていらっしゃったようでしたが、やがてそのことが少しずつ楽しくなってこられたようでした。床に在った金具に偶然身体が触れ、音が出て来たのです。それが次第にリズムを刻むようになったり、他者(が発した音)とのコミュニケイションを図るようになったり…。

「床にあった金具に手が触れたとき、偶然音がでた、リズムを刻んでみたくなった、楽しんで音を鳴らした。誰かが答えてくれることを期待した。椅子にのって進む人のリズムに合わせて音を出す。現場では気づかなかったが、あとで、答えて音を出してくれた人がいたことを聞いて嬉しかった。」(身体知実験授業 振り返りレポートより)

これは決して予め誰かが演出・指示したことではなく、その場で誰からとなくごく自然に生まれて来たことであり、このことが起こる以前には誰も予想しなかった出来事です。真の即興とは、読んで字の如く<即チ興ル>こと。何人たりとも事前にそのことを計画・準備することが出来ません。純粋な即興は何処までも作為や捏造を拒み続け、その在りようは常に自動詞的な<表出>(~が表出する)であり、断じて他動詞的な「表現」(~を表現する)にはなり得ないのです。

このことは極めて身体的です。あれこれ考えてから身体を動かすことでなく、考える前に身体が動くこと。思ったように身体を動かすことより、思わず身体が動いて仕舞うことだからです。15分程掛けて、とてもゆっくりと植物が芽吹くように、横臥の姿勢から完全に直立するまで動いて頂いた時、最後のお一人になって立たれた時のKさんの法悦の表情も、最初からそうしようと思ってしたのではなく、最後に思わずそうなって仕舞ったのでしょう。

そしてまた、これは飽くまでも<個>の身体に帰属するものであり、決して「集団」的身体には従属し得ません。このような<個><個>の身体の孤独が、確かにあそこに在ったのではないでしょうか? 授業終了後、突如として起こった井上ウィマラさんとの即興ダンスのデュエット。井上さんとくんずほぐれつになりながらも、私は氏のどうしようもなく深い孤独のようなものを感じていました。

「深い孤独の認識のみが、実は深い連帯をもたらすもの だ。」(石原吉郎)



岩下徹氏

撮影 山中隆史(やまなか・たかし)

真実の私、私の中核とつながるということ 小野京子(表現アートセラピー研究所代表)

今回の実験授業にアートセラピーの立場から参加させていただきました。私が実践しているのは表現アートセラピーという療法です。

表現アートセラピーとは何かと言いますと、これは
欧米で1970年代から発展した比較的新しい芸術療法
(Expressive Arts Therapy)です。その特徴は、絵画や造形などのビジュアル(視覚)アートだけでなくて、ダンス・ムーブメント、音楽や声、ライティング(文芸)、演劇など、すべての芸術表現を統合的に用いていきます。そして表現したものに分析解釈をしません。私たちが創造的な表現プロセスに入ることで自分のリソース(資源)とつながり、エンパワーされる(または癒される)と考えます。私たちがアートで表現するときに、頭(知性)、気持ち(感情)、身体、魂(霊性)のレベルすべてが関わると考えます。人の持つ全体性を重視するホリスティックな視点をもっています。すべての芸術表現を用いるので、この点からもホリスティックと言えます。

堅苦しい説明になりましたが、私はこのようにいろ いろなアート表現で自由に自分を表現することで、「本 当の自分、実感、気持ちや考え」につながる通路がで きると考えます。自分が自分とつながり、それを表現 することで、その場にいる他人とつながるという、両 方向のつながりができます。他の先生が感じていらっ しゃるように、「偽りの自分」で生きていくと、生きて いる実感や喜びに欠ける生き方、頭だけの生き方にな り、他者への共感や倫理が生まれにくくなります。アー トを用いたいろいろな表現は、自分の中と外をつなぐ 架け橋になってくれることを、今回の授業でも実感す ることができました。またいろいろな表現から自分を 語ることで、自分自身の言葉(人からの借り物でない) を獲得するプロセスが生じるように思います。そして 借り物ではない言葉は、人の心に触れるインパクトや 影響力をもつのですが、今回の授業の中で、それぞれ の参加者の方々との確かな交流を感じたのは、そうい う理由からだと思っています。私自身、言葉で語るこ



小野京子氏

とが元来苦手な方でしたが、自分自身が表現アートセラピーを体験して、自分自身の言葉を獲得してきたように思います。以下はそれぞれの授業についてのまとめです。

実験授業の第一回目は、カナダで実施されているLTTAという方法を用いての講義とデモレッスンです。LTTAは、主要科目(国語、社会、算数 – 数学、理科)を学ぶ上でアート表現を用い、感情や身体も関わる全人的な学習を促進します。2007年度の実験授業のお話を初めにいただいたときには、小野が全回担当するという流れでしたが、たまたまその時期にカナダの先生方を私が関わっているNPOでお招きしていたので、ぜひLTTAも実験授業に入れていただきたいとお願いし、LTTAが第一回目になりました。

LTTAでは、例えばダンスを用いて数学の概念(円や中心、弦など)を表現する授業がありますが、身体も学習に参加し、感情やその概念に対する印象を表現することができます。頭(知性)のレベルだけでなく、感情や身体も学習に関わり、さらに精神的でスピリチュアル(霊性)な側面も関わるので、道徳として徳目を教えなくても、共感や広い意味での愛や尊重という体験を学習者が持つことができます。ある教科(知識)を学びながら、人間存在のすべてに響く学習が可能になります。個人的なことで恐縮ですが、毎回LTTAの授業を受けるたびに、感動して私は泣いてしまいます。

こんな授業を私自身受けたかったなあ、と毎回感じます。私自身はからだを動かして学ぶタイプのようで、 ずっと座っての学校の授業は苦痛でした。

教科という枠(フレーム)の中でのアート表現なので、自由な表現とは異なり、心理療法ではありません。テーマが決まっており、自分の心の中を直接表現しなくてもよいので、人によっては入りやすいかもしれません。これに対して自由に何を表現してもよい時間とスペースが与えられるのが、心理療法としての表現アートセラピーです。この表現アートセラピーを体験していただいたのが、第二回と第三回(アート表現を通しての心身の癒しと成長パート1、パート2)です。二回目でグループの中で人と一緒にいることの安心感と信頼感を体験してもらい、三回目により深く自分の中に入って表現できるような流れを考えました。

そのため二回目は、他者とのコミュニケーションを促 進するエクササイズを中心におこないました。人と一緒 に創作することで、人と一緒に何かをすることの楽し さ、一体感、そしてインスピレーションを与え合うこと を体験してもらいたいと思いました。小グループで一 緒に粘土作品を作ることで、グループの一体感やグルー プの個性を体験していただきました。グループごとに個 性が異なる粘土作品ができて、グループの成員がそれを 意味あるものとして捉えられていたのが印象的でした。 グループの成員相互の交流によって、それぞれの個性が 受け入れられながら、さらにグループとしての個性が作 られていくプロセスを見て、これこそがお互いを生かす 交流になっていると感じました。言葉で話すよりもお互 いを受容できるというのは、アートの持っているすばら しい性質だと思います。同じ表現はなくて当たり前で、 個性がお互い違うことが一目瞭然で、それを肯定しやす いからでしょう。

最初にグループとしての安心感や一体感を作ろうとしたのには理由があります。私は現在ある大学で芸術療法の授業を受け持っていますが、最近の学生さんは自己開示が苦手な人が多いようなのです。講義のほかに芸術療法の実習も行いますが、彼らが自己表現し、それを人と分かち合うことに、非常に不安を感じていることに気づきました。他人に自分を開示するのに不

安を感じ、他者を信頼しにくい性向があるようです。 お互いの作品の分かち合いの時間があるので、この授 業を受けないという学生もいました。「本当の自分を出 す不安」とでもいうのでしょうか、これは中学生でも 多く見受けられます(私は中学校のスクールカウンセ ラーもしているので)。他者との交流の楽しさ、刺激し 合い、インスピレーションを与え合うという体験がど うも欠けているというか、人との関係の持ち方が下手 という印象を持ちます。そんなことからまず一緒にアー トを作ることで、その辺の壁を越えてもらおうと思い ました。でも今回の実験授業に参加された方々は、そ の辺はとてもオープンで、自然に温かく人と関わって いらっしゃり、感嘆いたしました。また先生や生徒、 社会人という違いや壁が全くなく、ごく自然に打ち解 ける雰囲気がありました。でもこの粘土作品を小グルー プで作るという体験で、お互いの信頼感、グループと しての凝集性が高まったと思います。

三回目に、参加者がもう少し自分の中に深く入るエ クササイズを行いました。最近の自分の喜びや悩みを 絵にしてもらい、その後でムーブメントを行いました。 いろいろなアート表現のうちでも、一番皆さんが抵抗感 を持つのが、私の経験では「自由なからだの動き、ムー ブメントやダンス」です。振り付けのない自由表現と言 われると、困ってしまい、人から見られるのも嫌と感 じる方が多いようです。この辺の抵抗感を和らげなが ら、この回では後半にオーセンティックムーブメント を行いました。このムーブメントは、動く人(ムーバー) と見守る人(ウイットネス)のペアに別れて、動く人 は目を閉じ自分の身体の中から出てくる動きをします。 そして動いた後、そのムーブメントについてペアでシェ アリング(分かち合い)を行いました。一人7、8分動 いたのですが、動いたときには「意外と短かった」とい う感想が多く、自由な動きの解放感や自分とつながる感 覚を体験していただいたようです。

四回目はふり返りの時間でしたが、今までのことを振り返りながらいつくか言葉(キーワード)を思いついてもらい、その言葉を手がかりに体験を統合していきました。他の人からも一つ言葉をもらい、その言葉の意味を加えて自分なりの体験のまとめをし、グルー

プ全体での分かち合いを行いました。他の人からもらった言葉が鍵となって新たな気づきを得た方もいて、興味深く思いました。自分が必要としている言葉を他の人からもらうという場面を、私は多く観察しています。またシェアリングをした人と意外な共通点があったなど、グループの中の共時性というものも頻繁に起こります。参加者が表面的なところでなく、より深いところで自己探求し他者と分かち合うときに、この共時性が起こりやすいと感じています。

自由なアート表現を行う場で私が一番大切に思うのは、「安全感、安心感、守られる空間」です。私自身はパーソン・センタード・アプローチの立場をとっています。このアプローチでは分析解釈をせず、個人が尊重され、表現が強制されない場を作ることが重要と考えます。心理的な自由と安全が保障されないと心やからだを解放することは不可能です。ファシリテーターは、エクササイズの単なる提供者ではなく、その場を守り参加者の自由と安全を保障する責任を背負っています。エクササイズのみが一人歩きしないように、この点はしっかりと守らなくてはいけないと考えます。

今回いろいろな先生が、ご自分の授業に身体や感性、感情を取り入れた学習を提供され、また人間の全体性を大切にする学習の必要性を感じていらっしゃる方々がいることを知り、とても勇気付けられました。学習とは広い意味での成長に通じると思います。学習とは自分が外界(他者)に興味を持ち、自分と外界がつながり、より密接で信頼感のある関係を樹立し、ダイナミックに関わっていくことと思います。そして自分の心と身体を開いた学びは知識のレベルにとどまらない、物事への本質的な理解と倫理が体得できるのではないでしょうか。今回の実験授業に関わらせていただいたことをたいへん感謝しています。

授業参加者を交えた自由討議

手塚 本日は2年間の授業に参加していただいた方や 記録者、観察者を担当して下さった方にも来て頂いて いますので、自由に感想やコメントをいただければと 思います。

武藤 慶應義塾大学法学部の教員の武藤と申します。昨年度の井上ウィマラ先生や佐藤仁美先生の授業に参加しました。今年度はあいにく仕事とバッティングしてしまって、最後の授業だけ出席させていただきました。

昨年のこの実験授業には、ヒントを得たというか、インスパイアされた部分があると思っています。私はイギリス文学の研究者で、別に英文学には限らないんですが、文学の授業をやっています。そこで常日ごろから文学や芸術作品の解釈を――大教室の授業なので、どうしても解釈をするということが主になってしまいます――学生にいろいろ興味を持たせようとしているのですが、やはり、芸術作品というのは身体知の領域だと思うのです。ですから、実際に体験して何か感じ取るのが大切だと思うんですが、そういうことは普通の授業ではなかなかできないのです。この身体知の昨年の実験授業でいろいろ勉強させていただいたこともあって、昨年の8月に文学の実験授業を行いました。

その授業の目的は、文学作品やその背景にある歴史 の問題を頭で解釈をするということと、体で感じると いうことをつなげるということでした。特に通常の学 期の授業では頭で解釈するということが主になるので、 それとつなげる形で、体で感じるということを主たる目 的とした授業のプログラムを考えてみました。

ですから、作品の解釈のようなことをみんなで話し合うこともしたんですけれども、同時に、例えば朗読の先生をお呼びして朗読をする、あるいは講談の先生をお呼びして、ある作品を講談という形に変える。それから、佐藤仁美先生の昨年のこちらの実験授業のワークショップがとてもよかったので、佐藤先生に或るテーマでワークショップをやっていただいたり、ダンサーの方に来ていただいてワークショップをしていただいたり、あるいはある作品に関して、それを基にして何か創作活動をしたり、つまり文学作品をめぐって、身体的なこと、あるいは創造的なことをみんなでやって

みようと試みました。

やってみてどうだったかと言うと、とても学生の乗りもよかったし、一週間こういったことを続けると体が非常に敏感になるのです。頭も体も非常に敏感になって、いろいろなことを感じ取れるようになります。その感じ取ったものに対して、丁寧に反応していくということが、生きることなのではないかという、一言で言ってしまうとそういう体験をさせていただきました。

ですから、ほかの科目でそういう身体知を取り入れていくというのは、確かにとても面白いことで、私が実際にやっていることもそういうことかと分かることが沢山ありました。皆さんには大変本当に感謝しております。どうもありがとうございます。

熊倉 では次に2年間の実験授業のほとんどに参加されたAさんからお話をいただければと思います。

A 私は小学校の教員を三十数年やっていて、今も6年 生の担任をしています。まず、横山先生とのご縁で塾外 の人間にも関わらず、この実験授業に参加させていただ いて、本当に感謝しています。ありがとうございます。

私は身体知という言葉が本当はどういう意味を持つ のかということを、よく理解しているわけではありませ ん。小学校に入ってから授業も担当していますが、教育 相談にかかわることが多くなり、そういうかかわりの中 で、例えば構成的グループエンカウンター(課題が決 められているなかでの出会い、心の交流をめざすグルー プカウンセリング、グループワーク) や、非構成的なグ ループエンカウンター(課題が決められていない、その 時その場のプロセスを大事にした、出会いと、心の交 流をめざすグループカウンセリング、グループワーク) などの、教育相談にかかわる研修を受けるようになりま した。その中で、やはり身体、体を通して何かを感じた りするという感覚が、それが知になるのかどうかは分か らないのですが、大事だと思い、横山先生のドラマを使っ た身体ワークショップ (2002年6月15日 日本総合学習 学会 2002 年度 [第5回] 総会特別講演、横山千晶「こ とばと身体の再発見――教育現場での演劇ワークショッ プ) に出会い、この実験授業にも昨年、今年と参加させ

ていただきました。

さきほど武藤先生からも、一週間続けた際の感覚についてお話がありました。私は非構成的グループエンカウンターの演習を合宿で受けたことがありまして、3泊4日の泊まりがけで、ずっと同じことをやるんですけれども、そのときにもすごく感覚が研ぎ澄まされるような経験がありました。

今回の実験授業もそういう意味では、聞いてみたり、 見てみたり、話をしてみたりということを実践すること で、自分の衰えつつある感覚がもう一度研ぎ澄まされた ように思います。そして、それがこの時間と空間の中で はもつのです。「もつ」というのは、実は先ほどお話し た合宿でも同じことが言えるのですが、その時間と空間 の中だと「もつ」のですが、しばらく経つと消えるので す。結局その中で聞こえてくる、響いてくることという のが、それが日常に戻ると、元に戻ってしまうという感 覚がありました。

ですから、この実験授業に参加したときにも、そこの中に浸ることで、ある意味陶酔してというんでしょうか、自分自身を感じたり、人を感じたりすることができたました。そして、これは、私は小学生を相手にしていますから言えるのですが、言語や絵や、いろいろなものを用いて育っていく、小学校6年間のプロセスに似ていると思うのです。

先ほどから横山先生や井上先生も仰られていますが、私自身も、本当に危機だと感じている部分がすごくあります。子供たち自身の知が、たとえば算数の学習1つ取っても、体積の計算を公式で教えたりするのが流行すると、結局それは視覚的なことだけで終わってしまうことがすごく多いのです。体積も、1立方センチメートルを作ってく多いのです。体積も、1立方センチメートルを作ってごらん、というようなやり方を通すと、やはりいろいろな意味での知が出てくるわけです。けれど、今は縦、横、高さの長さが分かって、それを公式で出すとこうだ、ということをぱっと暗記してしまうという知になっているのではないかと感じます。学力の低下の問題が今すごく言われていますが、学力の問題もやはりそういうこととかかわっているという気がしています。

「体をひらく、心をひらく

-新しい実験授業へようこそ」に参加して 篠塚憲一(学生総合センター)

私は、教職員一体という意味で、この実験授業へ学生総合センターの一職員として参加しました。「身体知」教育をテーマとした実験授業では、今まで経験の無いことを無意識のうちに体験できたと感じています。例えば、"こころ"の変化、"こころとからだ"の変化、"からだ"の変化などです。そこで学んだ、気付いたことは、自分が自分に(を)…、自分が相手に(を)…、相手が自分に(を)…をあえて意識したことです。

同時期に、日吉キャンパス教養研究センター「新しい 教養授業の支援」公募採択事業『ボランティア学ってな に!』代表を務めていました。そこで感じる事と同じ思い もしました。

自分なりに感じる「身体知」とは、正課の授業は勿論 のこと、正課外教育のいわゆる『導入教育』にもっとも密 接していることだと感じました。

熊倉 A さんは、2007年度実験授業の初回のLTTA (Leaning Through the Arts) のワークショップには参加されましたか?

A はい、参加しました。

熊倉 天文を動きで表現したり、ダンスを通して数学を 学んだり、ああいったことは例えば日本の教育、小学校 の教育現場で、実際に取り入れるのは難しいでしょうか。

A それは難しいです。内容的と時間的に、それから今 の教師の力量だと不可能に近いと思います。

熊倉 何故でしょうか。たとえば私は「芸術家と子どもたち」という NPO に関わっていて、総合的な学習の時間の立ち上げのときから、アーティストを招いてワークショップを開くようなことをしています。そうした専門の講師を入れるとしても難しいでしょうか。

A 一番難しいのは、教員の意識がちゃんとそこまで行かないと、やはりだめだと思うのです。たとえば出前で

専門の講師の方に来てもらっても、結局丸投げでやってしまうという状態が起きるだけなんです。英語のALT (日本の学校で外国語を教える際の外国語指導助手)のこともまったく同様です。自分は何をしたらいいか、何が本質的に大事かということを分からないまま委託しているだけで、何が進んでいるかが理解できていない。だから少なくともやることについては、基本的その重要性を、頼む側の教員がよく分かっていないとだめだろうと思います。

やはり自分の問題として持たないといけないのです。 この身体知のことは、美術だけの問題ではないわけで す。基本的には数学であろうが、国語だろうが、いろい ろなところで実現されるはずのことだという、その哲学 を持たないとやはり駄目なのだろうと思います。

熊倉 ありがとうございます。では、ほかの方にも感想を含めたご意見を伺いましょう。

B 初めて「身体知」という言葉をまず目にしたときに、

「知」と付いているところが、何というかうっとうしく 感じられました。やはり何か大学がうたっている感じ がしたのです。それは身体知全部を否定したくて言っ ているのではなくて、自分の体の中で起きていた感覚 です。大学という存在、歴史の中で何かをとらえ返して、 類型化というか、何かの提示の仕方をしないと収まり がつかない慣習のようなものを、どう捉えながら、この 「身体知」をやっていきたいと思っていらっしゃるのだ ろうと感じたのです。

いわゆる大学教育の中で、専門性や先端領域や学際的なアプローチなどが常に言われ続けてきていますが、一番の大本のところをやはり見たいと思う、そこを無視するわけにはいかないんだと思っている方たちがいらっしゃるからこそ、こういうプロジェクトが出てきているに違いないとはすごく感じています。だけど言葉としてどういうふうに表に出すかという局面で、どうしてもその「知」というのは自分にはうっとうしく感じられたのです。自分自身でも平気でいろいろなところで言うかもしれないけれど、それでもうっとうしいのです。



熊倉 この「身体知」という言葉が、我々の活動に対して、果たして妥当な言葉かどうかというのは問題になっています。ほかにうまく表現できる言葉がありますでしょうか。

B 言葉がないんですね。でも私の中では「知恵」なんです。 単に人が世代から世代の間を介して、時をまたいでずっと手 渡し続けていたり、新しいものを付け足したり、元からその 伝統の中ではまるっきりこぼれてしまっているものを、幼い 子たちが知らないところで、その世代の知見では拾えていた り。その知恵のある側面というか、あるところから見透かし てみると、それは身体知として浮かび上がってくるのではな いかと思うんです。

熊倉 人類としては逆に、西洋近代以降、言語中心の知になってしまいましたが、近代以前はそうではない知の方がむしろ豊かで、それで文明も栄えてきたと思うのです。

私は、例えば「身体知」という言葉をあえて使うことによって、「知」というものは単に言語化された「知」だけではないんだということに人々に気付いてほしいのです。ただそれが現に身体知にかかわっていない人にも伝わるかどうかは、分からないですね。やはり誤解を受けてしまうかもしれません。

手塚 学生さんで参加された方の感想などを聞いてみたいと思います。

C 参加したきっかけとして、自分自身の話をしたいと思います。私は小さいころから絵が好きというか、気が付いたら絵を描いていました。幼い頃は何を描こうかとあまり考えずにすぐ描けていた気がしたんですが、高校に入って、自分で美術の授業をとって描こうとしたら、急に何か白紙が怖いというか、何を描いたらいいのか分からなくなってしまったのです。

それから、音楽にも興味がありました。好きなミュージシャンが曲を作られるのがすごくうらやましいなと思ったんです。けれど、いろいろなインタビューなどを読んでいくうちに、何かそういう、自分が作りだす人、芸術家とかアーティストと呼ばれる人は、自分からあふ

れ出るものがないといけないのだと思って、軽く失望したというか、自分ではだめなのかとがっかりしました。

大学では私は哲学に興味があって文学部に入り、この1年間哲学の授業など、いろいろな授業を受けました。そして、大学の授業を受けていくうちに、自分の価値観を1回壊してみようという考えに到ったのです。これまでの人生を思い出すと、成長してくるにつれて、集団の中で競争があったり、どうやってうまく生きていくかを考えなくてはいけなかったり、まるでサバイバルのようでした。私は昔から素直にというか、あまり歯向かったりしないで全部受け入れてきてしまったと思うんです。でもそれに歯向かってみたり、一つ一つのことをなぜそうなんだろうかといちいち考える必要があるなと、少し思い始めてきたんです。

あるとき、哲学の先生としゃべっていって、「文章を 読んで、ここは違うのではないかと言えるようになりま した」と言ったら、先生に「君は今子供をやっているん だね」と言われました。

そういう経験も、自分で自由に表すことができなかったのも、周りの目が気になっていたり、一般的にこういうことを言ったり、書いたり、そういう動きをしたらかっこ悪いのではないかというのが、たぶんあったのだと思います。

今回、参加してみて、非日常的というか、小さいころのように無邪気に本当に遊ぶ感覚でした。すごく楽しくて、子供のころの自由さというか、子供らしさみたいなものをいろいろ思い出したりして、それをいかに失わないかというのが、今の私の人生のテーマになりました。

この授業を通しているいろな経験をしてみて、自分の感覚が信じられるようになったというか、表現することに関して、前より何となく楽にいられるようになったと感じています。

熊倉 アーティストというのは、ある種の子供らしさをずっと保ち続けていて、それを世界に対して表現していますね。ここに、実際にダンスをやっていらっしゃる方がいますが、いかがでしょうか。

D 私は、コンテンポラリーダンスというジャンルで現役のダ



ンサーをしていますが、それだけでは食えないので、学習塾の講師もしています。ですから、先ほどの A 先生のお話はかなり共感を持って伺っていました。教育や芸術などと「からだの問題」との関係が、今、私の中でいるいろとリンクしています。

塾でのことですが、からだを使う経験が乏しいことで、子どもは本当にあり得ない解答を書いてくるんです。例えば自分でバケツを何杯もくんで水を持っていったことがなかったり、自分の足で歩いて何キロメートル行ったことがない。計算力は完壁。でもそういう経験の欠落からくるような、何で?という間違いをここ4・5年よく目にします。一方で、教室の輪を乱すような元気な男の子の方が、落ち着きはないんですけれども、最終的には、多分こんな感じじゃないかと、勘で書いてくる答えが当たっていたり正解に近かったりするんです。お勉強はどちらかというと不得意でも、遊ぶことでからだの感覚が豊かな子の方が生き残っていくんじゃないか、そういうことを感じています。

あとは、自分の想いを言葉で表現しない、またはできない子どもが非常に増えてきました。授業をいい子で聞いてはいるんです。だけどまったく反応がなかったりして、ちゃんと聞いてるなと思うと、全然聞いていなくて、形だけだったりします。子どもたち同士や大人との間で、からだの感覚とつながった「本音」の言葉を直に発するコミュニケーションの機会が減っているようにも感じます。喧嘩するくらい元気な男の子や面と向かって大人に反抗してくる子も減りました。そのぶん、携帯メールでの友達とのやりとりは神経質なくらい頻繁ですが。

私はコンテンポラリーダンサーをしているとお話ししましたが、このダンスに関してもエネルギッシュでワクワクするような原初的な身体性の欠落みたいなものを最近感じます。東京という都市型の価値観の文化圏の中でダンス公演をやるときに、ダンサー自身が自分の身体をどう出していくか、お客さんにどう問い直していくかということが大きなテーマになってしまって、情報の中で右往左往している都市生活者の孤独な身体が提示されることが多いです。何かぐるぐる頭の中だけで体という問題が回っているみたいで、ダイナミックなものが出にくい感じです。まぁ現在の都市を象徴していることでもありますが。私も作品を東京の劇場システムの中で発表するにあたって、正直いったいどんなものを問い掛けていいのか、迷うところです。

私は、また同時にダンサーとしてワークショップをいるいろな場所で行う活動もしています。こちらは、例えば幼稚園や、保育園、あとは認知症のある、それこそ「みとり」直前のお年寄りを対象とした、ダンスや身体表現遊びのワークショップです。その場にいる人とともに即興でダンスや動きの表現を創ります。公演活動と違ってこちらは迷いなく、発見や歓びが多いのです。

実は、この子どもやお年寄りといったあまり劇場に 来ないような人たちが、私にとって今いちばん面白い ダンスの最前線だと思っているんです。そこにいる人 たちは、私が有名か無名かなんて関係ない。アートシー ンでの位置づけも関係ない。ダンサーと観客という関係 すらない。少しぼんやりした意識の世界で生きていらっ しゃるお年寄りにとっては、目の前で起こることがす べて。意味になる以前の感覚がすべての世界です。いっ しょに踊っていて「老人力」が生々しいダンスになる瞬間を何度も体験させてもらいました。作品を創って都 市で発表する活動以外に、ダンサーとしての技量が問わ れ、かつ活かされるスリリングな現場です。これが制度 化される以前の踊ることの原風景なのかもしれません。

そしてまたワークショップの現場として保育園や幼稚園というところも同様に面白いのです。関わってみて感じる事ですが、遊びと教育が未分化な幼稚園や保育園はきっと「身体知」の土台をつくっているところなんじゃないでしょうか。そこに関わることはやりがいの

あることです。ここで私はダンスというより身体表現遊びのワークショップをやっているのですが、遊びの中でからだを使うこと、そして他者とからだ丸ごとでコミュニケーションをし、育ち合うことが保育園ではふだんの生活の中にも多分あることを知りました。関係したある保育園は食育に特に力を入れていたり、男女年齢層とも多様でバランスのいい保育士さんたちに見守られるようにしていたり、異なる年齢の乳幼児間の交流もあった。かつてあった大家族や地域社会の中での育ち方の代替として、機能していたように思います。からだを使う、他者と関わる。ここにワークショップの本質があるのだと自覚させられました。

だからなのでしょうか、そこの保育園で感動したひと コマがありました。5歳児クラスで喧嘩が起きて、大人 の手を借りずに自分たちだけでちゃんと解決していく というプロセスを見たんです。ある子が自分がぶたれた などと明らかに嘘を言っている。そうすると記憶力のい い子、少し言語が発達している女の子が、「あんたはそ ういうふうに言うけど、違うんじゃないの、私は見てい たわよ」とズバリ言うわけです。わいわいがやがや何 人かで話し合いがはじまる。嘘を言った子はすごく困っ てくるんですけども、泣いてわーっとなって、そこで一 応終わるんです。子どもながらなんとも言えないキマズ い空気になったりするんだけれども、その後にみんな で一緒に駆け回って遊びの輪が再びできて後腐れなし。 何で5才のこの子たちができて大人が社会でやれないん だと正直感動しました。とても心が洗われました。ちな みにこの子たちとは、その後やはり素晴らしい即興ダン スワークショップが成立しました。

最後にもうひとつ。「身体知」をめぐって横断領域的なこういう集まりがもたれることは、とてもいいと思うのです。ワークショップや授業という形式で、「身体知」なるものを体験し考察するきっかけが広がるのはとてもいい。しかし、その後をどうしていったらいいのか、どう各々の生活に還元していくか、そこが気になっています。「ワークショップ終わってしまえばモトの人」。これではさびしい気がします。

まだ私にも答えは出ていないのですが、ひょっとする と毎日おいしいご飯を家族で作って食べたり、テレビを



消してみんなが話していたり、暖かい布団で寝たり、おじいさん、おばあさんの話を聞いたり、季節折々の風土に根ざした年中行事に参加したり、ひと昔前なら当たり前なんだけれども、そういう衣食住つまり生きる基本全般のこまやかな見直しに最終的には繋げていかなくてはならないのではないか、と思います。もちろん単純に過去に戻ることは難しいです。現在の生活スタイルの中で、そういうところまでやはり変わっていくぐらいの、難しい志かもしれないけれども、そこまで見据えて「からだの問題」に向き合っていかなくてはならないのではないか、と思っています。

原因探し、犯人捜しばかりしたら皆つらくなるばかりなので、もう少し手の届きそうな希望に落とし込んで、 先ほどお話しされた学生さんのように、何かふだん生きることが楽しくなったというような声を聞けるように、 異なる分野の人間が知恵を合わせていけたらいいと思います。

E 私は今保育園でご飯を作っているんです。幼児の教育の勉強もしていて、今年で保育士の資格が取れるというところなのですが、正直このまま調理の方をやり続けていくか、保育士になるかというところで、少し迷いがあります。

というのは、自分の中に、葛藤というほど大げさな ものではないと思うんですが、問題を抱えているのです。 それがちょうど今皆さんが、身体知がないことによって 起こるとおっしゃった今の子供の問題点、それを自分の 中にすごく感じていて、ずっとその危機感を自分で抱えていたところに、このような企画をちょうど見つけたので、これは運命だと思って参加しました。

自分自身の中で、何でこんなに苦しいんだろうか、何でこんなに混乱するんだろうと、整理がつかなかったことを、しゃべり慣れている方がたくさんいらっしゃるなかで、私の普段の生活では触れ合わないような話し方で、私が言いたかった、感じていたようなことを、皆さんそれぞれの言葉で語ってくださったことが、すごく入ってきたんです。

当事者としても、例えば「身体知」がないことによって、計算で信じられない数字が出てくる、それにも気付かない、そういうことは実際私の中にも近いような体験があります。例えば朝新聞を読んでいても、情報がたくさんあるところで、取りあえず読んで、ばっと読んで情報を「入れていた」だけなのです。そこで問題に気付かない。流れていって、読んだ意味があるのかどうかというような、そういうことが普段でもすごく多いんです。だけど、周囲との会話を成立させるためにも、情報は理解しなくても取りあえずは入れておかないといけない、

「身体知」をめぐる広がりに期待します。

新井英夫 (ダンサー/体奏家)

私はコンテンポラリーダンサーの立場から、主に非言語的コミュニケーションから生まれる即興的な動き、および音や造形を含んだ綜合的身体表現を導く「からだのワークショップ」を幼稚園・保育園・老人施設等で、また大学の授業でも実施しています。これらの活動は今回の身体知実験授業とも重なる領域だと思われますので、特に担当している山形大学地域教育文化学部での授業「身体と芸術」での私感と関連させて「身体知」への期待を書きたいと思います。

美術・音楽・体育・国語などの教員を志す多様な学生が受講するこの「身体と芸術」の授業で私が目指すところは、二つあります。

一つは教科として細分化してしまった知の各領域を「すべてはからだから生まれたこと」として再統合化してみる体験型かつ恊働参画型授業を実施すること。これは私自身が言葉・身体・音楽・美術の綜合的表現である演劇、その後にダンスという身体表現の世界を歩んだ経緯から自然と生まれた発想でした。また「総合学習」の深い理解や指導に将来不可欠と思われる、身体に根ざした横断領域的な教員養成カリキュラムを補完できればというねらいもあります。

二つめのテーマは、「即興」というすべての芸術表 現が原初的に有する、個および集団での創造の方法の 再開拓と検証です。

なぜ「身体と芸術」で「即興」なのか。ダンス・演劇・音楽・美術など全ての表現行為、これらのおおもとは自分自身のからだとの、また自分と他者(人・もの・こと)との「即興」の対話なのではないか。例えば優れた演奏やダンスの即興セッション。そこでの「即

興」は独りよがりや無秩序ではなく、かといって予め全てがプログラムされているわけでもありません。自分にとっても他者にとっても丁度いい関係を行き当たりばったりに探り続ける能力。これが「即興」だともいえるでしょう。そしてその能力は意識より早くから働き、言葉より深くからくるもの。この概念をひろげるなら、我々が日々生きていることも、さらには生命現象全般も「即興」なのでしょう。芸術の問題としてだけ「即興」を扱うのはもったいない。このあたりが個人的に今、大変興味深いところでもあります。

こうしてみると私には「即興」と「身体知」とは親和性が高いように思えてなりません。ただ両者の関係を究明し、議論にまで高めていくことは私一人にはどうやら荷が重いようですし、それはあまり広がりを持つことでもなさそうです。私がいつも実感することですが、面白いワークショップがそうであるように、関わる人が多様であるほど結果はより豊かになるものです。

演劇・ダンス・音楽・美術、文学・哲学・医学・心理学、人文科学・社会科学・自然科学、教育・福祉・宗教、体育・スポーツ・武術、オフィスワーカー・職人さん、学者・学生、子ども・青年・大人・老人、障がいのある人ない人、同性愛の人そうでない人、などなどなど、同時代を生きる多様な人々の知が「身体知」という共通の土俵が提示されたことで、繋がって、新たな価値観の潮流が生みだされることを期待しています。 誰しもみな、からだをもって生きていることは共通なのですから。

そういうことは皆さんもあるといます。

私は、大学を卒業してから今の仕事に就くまでの間にいるいろな経験をして、今はこうして食事を作るようになったんです。そこで、思春期で混乱した時期から、今ようやく落ち着く時期までの、自分の中の小さいけれどもオアシスみたいなものを手に入れたと思っているんです。それは心の知恵みたいなものです。そこに行き着くまでにはヨガだったり、先生がおっしゃっていた自分の生活を1から見直すということを行いました。3食をきちんと食べる、作る、朝きちんと起きて、寝て、ちゃんとした時間に仕事に出るという、ごく当たり前の生活です。すごく分かりやすい、できた生活というのをやってみると、それが自分でも心地よかったりもするんです。ただ混乱からの回復期にはよかったんですけれど、今それがすごくまた苦しくなっているんです。それはやはり、身体知がないということにも1つ繋がると思います。

先生方や皆さんが「たぶんいろいろなことを考えて、いろいろなことを感じてやっていらっしゃったと思う」とおっしゃいましたが、私は結構整理がつかないまま、ほやっとしていた部分がありました。

それはやはり自分の中の気付き、言葉のストックや、考え方。何かが起こって、この1点、私はこれを考えた。だけど、それは本当に自分の頭で考えているのだろうか。いろいろな人の考え方をコピーして、1、2、3と進めばここに行き着くと知っているからやっているのではないだろうかといったことです。

今まではそれにも気付きにくいところはあったと思うんです。今は1、2、3以外の本当に無限の考え方、プロセスがあるということを知っているのですが、それをどうしたらいいか分からないのです。今の多くの子供たちというのもそういう状況なのではないかなと思います。いろいろな生き方があるんだと言われても、表面上は理解できても、芯から理解しているかということです。

私自身も、他人のコピーではなく、本当に自分の頭で考えて、知って、自分で感じて、それを自分の言葉で会話する、考える。そういう、普通なんだけれども、すごく実のある生活というのを求めているんですけれども、そのためにはどうしていいか分からないというのがあるのです。

その打開策というか、成長したい気持ちがあるので、 先ほどの先生が「日吉の家」の構想を述べられて、どな たでも来られて、みんなでいろいろなことを体験でき る、そういう場所もあったらとてもうれしいと思うし、 ぜひいろいろな経験をしたいと思うんです。ですから、 今回の講座は、外から身体知がないことを問題視する という目でも見えましたし、自分自身の問題としても、 よかったと思っています。

F 私はA先生と同じ小学校で、図工を教えています。 私が身体を感じた、意識したのは、恥ずかしい話なんですが腰痛になってからです。30歳を過ぎてから大した病気ではないんですが腰痛になって、本当に痛くて、何かそこから体を――たぶんそれまでは無意識的には思っていたんでしょうが、そこから体を少し意識しました。今まで体と体がつながってという実感はなかったんですが、本当に腰が痛くなって、体と足はつながっているんだと。それでだんだん、本当に腰が痛くなると、気持ちも落ち込んで、気持ちもつながっているんだと実感しました。やはり体は大切なんだという、当たり前のことを、本当に30歳過ぎてから実体験として感じたのです。

この授業に参加させていただいて、参加している最中は評価されない——別にいつも人の評価は気にしないのですが——評価されないという安心感がすごくあって、面白かったんです。それから、一つ一つ作ったものや行ったことを周りとシェアリングをしますよね。それがとてもよかったと感じています。理解してもらえているのかどうかは分からないのですが、ただ聞いてもらえることが、うん、うんと共感してもらえるだけでもすごくうれしかったので、何かそういうことを授業の中で子供たちにできたらいいなというのは、すごく感じています。

普段私は子供たちにいろいろなものを作らせながら も、最終的には評価をしなければいけなくて、そこの矛 盾がすごく嫌です。一応テーマがあって、そのテーマの 中で何でもいいと、あとはあなたの世界を作ってとい うスタイルなのですが、でも結果的には私はそれを評 価しなくてはいけません。学校教育の中の図工だから、 評価をしなければいけないのですが、でも本当は表現を 評価なんかできない。そこに、いつもすごく悩んでいて、 本当に子供には申し訳なく思っているのです。

G 私は日頃から皆さんの前でお話しすることや、自分の感じていることを言語化するのが非常に苦手だというのを感じています。

この身体知の授業の中で、ペアになった人と架空のも のをやりとりするという授業がありました。そのとき に、やりとりをしたときの自分の感じと、実際のコミュ ニケーションの苦手意識が似ていること、自分がその架 空のものをどこに投げてしまうか分からないことを、話 をしたときに、受け手のペアの方に、「どこに行っても いいから、とにかく投げてみるのが大事だ」と、「そう したら相手の人は受け止めてくれるからしという話を していただきました。それは私の日常でも同じことで、 こういう場で何かしら意見を投げ掛ければ、相手の人 は私が言いたいことがよく分からなくても、受けとめ て、それを分かってくれようとする、これもこの授業で 得られたことです。日常が楽に過ごせるようになって、 こういう場でも、話すのは相変わらず苦手なのですが、 でも前よりは緊張せずに言いたいことを言えるように なったと感じています。

こういう言葉にするという作業は非常に大事なことで、なかなかこの身体知の授業は言語化するのが難しいと思います。感覚や気持ちや、そういうことなんですけれども、実際に言葉にしたり、書き留めてみたりしないと流れていってしまうというか、定着するのが非常に難しいのだと思います。

H 受講はしていませんが、Dさんのダンスのワークショップは何回か出ている経緯で、今日は参加させていただきました。私は小さい出版社にいるのですが、しゃべるのは非常に苦手です。

身近なところでいうと、自閉症の本の編集に携わったことがありました。自閉症の方が内面から書いた文章だったのでは、普通の人だったら痛いと感じる感覚や、抱きしめられるようなことがくすぐったかったり、痛かったりと感じるというようなことや、あと金属音にも

のすごく魅せられてしまうといったことが書かれていました。

それは、本当に自分とは違うんですけれども、共感する部分もあるのです。例えば真っすぐ向かってくる感情が怖い。だから斜めに座って、自分と対話したいと思われるのが嫌なので、例えばうわさ話のようにして、〇〇さんのことを話すのに、違う人に向かって、〇〇さんってこういう人だよねと言ったり。そこは少し、私も居酒屋などへ行って斜めに座る方なんですが、そういうことは分かったりします。

ですから、自閉症の方の感覚はすごく不思議なんだけれども、本物という感じがします。今回の「身体知」というのは、身体と滑らかに付き合う方法を獲得していくことなのかなと感じました。

高山 理工学部の教員の高山です。昨年度の実験授業に数回出席させていただきましたが、私にとっては本当に貴重な体験でした。今、皆様のお話を伺って、あらためて自分のことを振り返ってみて、私自身の体験をお話しします。私はどちらかというと感じる方が強い人間だと子供のとき思っていました。それがなかなかうまく言葉にならずに、説明しないと伝わらないので、何とか言語の力を身に付けたいと思っているあまりに、今度は身体が動かなくなってしまうという体験が逆にあったりもしました。

大学生ぐらいになると頭だけが大きくなって、体で感じられなくなったり、拒否感がでてきたりするのです。この世界はもともと自分がすごく安心できる世界なんだけれど、逆に怖くなったりということもあって、またそれを取り戻さなければと、いつも体と心が行ったり来たりということが、自分の中でのテーマとしてありました。

私は大学で心理学を教えているのですが、心理学の授業以外に人間関係論という授業を持っています。そこではいくつかのエクササイズをやりながら、自己理解、他者理解を促し、それを言葉にするということを行っています。

授業をする立場で感じることですが、私が授業で出会 う学生は、基本的に理工学部の学生です。日頃は頭で考 えたり、数式で考えたりする時間がとても多い学生たちです。しかし、逆にそれだけではだめなんだということを、実感として感じる学生が特に3~4年生になると多いように思います。

私の授業は、総合教育科目と慶應ではいいますが、いわゆる一般教養的な授業で、必修ではありません。ほかの科目より少し毛色が違って面白そう、楽そうだと思う部分もあるかもしれませんが、専門科目以外に人のこころや人間関係に目をむける大切さを、学生の方がどこかで確実に感じとっている、と気づかされる時間がよくあります。

いろいろなやり方があると思いますが、単に頭でだけではなく、体を使ったり、自分の心を解放したりということが少しでもできるような、もしくはそのきっかけになるような、空間を提供するということが、大学という場でとても大切なことなのではないかと、今日お話を伺っていてあらためて感じました。

手塚 せっかく遠いところを来ていただいたゲスト講師 のお二人から、最後に一言ずついただきたいと思います。 佐藤 皆様のお言葉一つ一つ、うなずけるというか。私 は体やこころ・頭のどこかで感じていながらも、私の場合には言葉にならなかったことが、皆さんのところから発せられていたのを、あぁ、そうそうと思って、ずっと聞かせていただきました。

手塚先生が「場」ということをおっしゃったと思うんですが、例えばその「三田の家」や「日吉の家」という、そういう場があって、そこを運営するちゃんとしたスタッフというか、しっかりと見守ってくれる器・自由にして保護された空間というか枠組み、何かそういうスタッフの皆さんがいらっしゃるからこそ、成し得るものだと思います。つまり、個だし、集団で感じて、場で感じて、環境にも自然と馴染んでいって(意識したらそこの存在を認められるが、自然にその場と融合してある感覚)、周りとも理解し合って……どんどん広がっていってしまうんですけれども、何かそういうトータル的にすべてそこに偶然の必然で揃っていて、卵とニワトリのような関係のように、どちらが先か分からないんですけれども、それでこの身体知があるのかなと、そんなふうに感じました。



井上 皆さんのお話を聞いていて、身体知あるいは身体性ということのテーマに対して、いろいろな分野の人がこうやって集って、実験したり体験したりシェアリングすることで、おそらく私たちはコミュニティーをつくり直そうという、大きな社会の動きの中に触れているんだろうと思います。昔ながらの共同体、血縁、地縁社会をもう復活させることはできないでしょうけれども、そういう、たぶん家族の力、つながりの力をどういう形でよみがえらせようとするのかを、やはり社会が人を育てるということの中で考える必要があるのです。

身体ということなんですが、共同体の体も入るので、 私たちがその身体性に戻って、いろいろな、それぞれ の専門分野で身体性を回復させていくこと、それをこ うやってまたみんなでわいわいとシェアリングしてい くことによって、新たな共同体づくりの指針・コミュニ ティーの指針というのができていくんだろうという予 感がしています。

私自身、瞑想する中で、いろいろな精神領域などとい われる、その世界がよく分かるようになって、それはそ れで1つの世界として大切で、その瞬間のコミュニケー ション、魂のやりとりをする喜びがあったり、こういう 世界を生きていくんだと思うこともあるんです。そうい う中で、やはり生まれてくること、死ぬことというのは、 魂が体に入っていく、どこまで入ってどうその世界を 生きるのかということ、それからその魂が抜けていく、 それの見守り役というのをたぶん業としていて、昔は お坊さんがやっていたんでしょう。私は今のスピリチュ アルケアというものにかかわっているけれども、スピリ チュアルケアというものが意味するものは、おそらく医 療のコミュニティーの中で、生まれてくることと死んで いくことを見守る役割を、医療コミュニティーがどうい うふうに創造することができるのかということだと思 います。

でもよく考えてみれば、それは医療のコミュニティーの話だけではなくて、さまざまなコミュニティーの中で生まれてくること、死んでいくこと、魂が住み込んできて立ち去ってゆくこと、そのプロセスを大切にしていく、見守りというものの大切さ、それこそがスピリチュアリティーかと思っています。ですから、今日こうやっ

て皆さんのお話を聞かせていただいて、私たちはある意味での新しいコミュニティー創造に向かって、身体性を通してつながって、模索しているのではないかと感じています。

熊倉 せっかく出会ったわけですから、ぜひこの機会 に、慶應大学だけではなくて、いろいろなところでそう いうコミュニティーが広がっていけばいいと思います。

手塚 そうですね。今回、思いや課題、いろいろなものを共有できた、このコミュニティーが広がり、また出会いがあってシェアリングしていく、そういうチャンスが今後もあればいいとすごく感じました。本日は本当にいろいろありがとうございました。

身体知実験授業を振り返って

新井由紀子

知らない人ばかりのなかで小さく縮こまっていたわたしのこころ、固まっていたからだ。人にどう思われるか、よく思われたいという意識が強く、自分に自信を持つことができない、小さなこちこちのわたし。こちこちのわたしは、いろいろな方向に恐るおそるそおっと触覚をのばしてみる。

ペアになって、想像上のいろいろなものをやりとりする セッションのときに、相手に投げかけてもらったものを、 そのままようやく受け取り、やっとのことで、直球で投げ 返すことしかできない自分を見つける。やりとりのなかで、 どんなものを投げても相手の人は、受け取めてくれ、その ことからペアの相手の人への信頼感が生まれた。

やりとりのあと経験を言葉にしたときに、やりとりしたときの自分の感じと、実際のコミュニケーション時の苦手意識が似ていることを伝えると、ペアの相手の方が、「ワンバウンドでも、相手に投げてみてはどうか」と言って下さった。とても心強くて、こころにぽっと明かりが灯るようだった。その言葉に、直球勝負しか、自分一人で投げきるしか道がないように思っていた気持ちが、とても楽になった。コミュニケーションには、必ずキャッチャー(受け手)がいて、少々の悪球も受けてくれるし、もし打たれてしまっても、周りにもボールを投げ返してくれる人たちがいると、教えてもらった。ようやく伸びをひとつして、身の丈になれた。

何人かの人とやりとりをするセッションに参加したときには、投げかけるものが、誰かに偏らないように、と考えた。 どこからものがやってくるかわからないスリルがある。意外 と誰に送ったのかわからない場面はなく、お互いに渡され たものを正確に理解して受け取っていたように思った。他 の人が多彩なパスを出せるのを、まぶしく見た。

コラージュは本当に楽しかった。自分の好きな色や形、図柄の素材を選び出し、切り取り、気に入った場所に貼り付けていく、その作業自体が面白くて夢中になった。ほかの人たちの貼り付けるさまざまな素材たち。大きなハードカバーの本がそのまま開いた状態で立ち上がり、貼り付けられ、紙吹雪が散らされ、大きな紙を幾重にも折った紙の花が咲く。平面にとらわれていたのが、触発されて、小さなカタログを、見せたいページを折って見せつつ、読みさしの感じに開いて固定する。言葉に依らない自分自身の表現。人の作品も鑑賞しつつ楽しむ。あとで、自分の貼

り付けた料理の絵に、お酒を付けてくれた人がいたのをみつけ、喜びを感じる。作品と調和し、一体化しようとする自分。 笑顔になる。

連歌の最中、自由な音を繰り返すような歌が作られたときに、怒りが湧き上がってくるのを感じた。とらわれない、その自由な感覚を面白いと思う反面、そんないい加減な言葉の扱い方でいいのか? と感じる自分を見つけた。

連歌は、思いのほか瞬発力が要求されることに驚いた。お題に正確に答えようと考えていると、次々に歌を付けていく人がいて、どんどん変わって先に進んでいってしまう。会話でどこでどう参入しようかと思っているうちに、話題がかわっていってタイミングを逃してしまうのと一緒だと感じた。家に帰ってから、子どもにそのことを話した。「私、のんびりしてるから、話のペースが人と合わないみたい」。すると「いいんだよ、ママは自分のペースで。ペースが速い人が3回ぐらい回って戻って来たところで話せばいいんだから」と言われた。そうか、それでいいのかと思えた。子どもにはいつも生きる力をもらう。自分のリズムを人と同じ速さにすることはできないけど、合わせて気持ちの良いリズムを刻むことはできるかもしれない。

腕をひものようにまとわりつかせるような、たこになったような準備運動では、これまでのセッションでもほぐれきれなかった、からだそのものがほぐれてきた。からだの感覚が鋭くなったように感じる。

アメーバーのように不定型に全身を使って進むセッションでは、床だけではなく、周りで動き回っている人に、そっと触れて、相手の反応を試してみたい衝動にかられるが、不用意に触れて、相手に変な奴と思われるのが怖くて、触れることができない。

いろいろなものに触れてみるセッションでは、「もの」ではなく、人に触れてみたいと感じた。壁を手や背中などさまざまな部分で感覚を楽しむことからはじめて、床に下りていき、床にあった金具に手が触れたときに、偶然音がでた、リズムを刻んでみたくなった、楽しんで音を鳴らした。誰かが答えてくれることを期待した。椅子にのって進む人のリズムに合わせて音を出す。現場では気づかなかったが、あとで、答えて音を出してくれた人がいたことを聞いて嬉しかった。

身体知実験授業に参加して

慶應義塾大学理工学部准教授 髙山 緑

とても穏かな流れの中で身体知の実験授業は始まった。数回だけであったがオブザーバーとしてその場を共有した私は、実験授業終了後、授業を検証するために客観的に観察し、記録する立場にあった。しかし時空間を共有する中で、私もその中のひとりの存在となり、静かに、そして伸びやかに繰り広げられている身体知のワークのダイナミズムに私自身の身体も反応し、身体に対する感覚が次第に研ぎ澄まされていくのを感じた。

自分のこころの有り様を語るという点で、時に身体は 言葉よりもはるかに繊細で雄弁だ。例えば、私たちは自 覚していなくても、強いストレスがかかっていると手が 冷たくなったり、体が硬直したりする。また、こころが ひとまわり大きな自分に成長したい、このままではいら れないと感じるときも、それとはっきり意識する前から、 体が反応していることすらある。それゆえ身体の声に耳 を傾けることはこころの声に耳を傾けることでもある。 自己の身体への感覚を鋭敏にし、こころの声に耳を傾け、 解き放すことで、より安定したこころの状態を得られる 可能性が広がる。

しかし、自らのこころに潜む、自分が今まで気がつかなかった自分自身の多様性や異質性に気付くことは、心地よいことだけではない。なぜなら新しい発見は自分では認めたくない自分の弱さや抑圧してきた感情、思考を解き放す危険性も孕むからだ。それでもなお、それから目をそらさず、耳をふさがず向き合ったとき、ひとはある種の"死と再生"のプロセスを経ながら、自己を豊かにさせていくことができる。それは異国の地でそれまで直面したことのなかった多様性や異質性との遭遇の中で自己が揺さぶられ、時に驚き、時に憧れ、時に嫌悪し、時に排斥したくなるような衝動にかられながら、相手と対峙し、相手を理解し、自己を相対化し、あらたな視点や視野をもって自己の存在を確かめる——そんな、新しい世界を取り込むプロセスと同等の、あるいはそれ以上の痛みと重みをもつ。

それゆえ知の創造の場であるとともに、自己を豊かに 成熟・変化させていく場である大学という空間では、もっ



髙山緑氏

と身体に対する感覚を研ぎ澄ます必要があるのかもしれない。より専門性を極め、新しい知の創造をしたいと願っている学生ほど、自己を豊かに成熟させる必要性を感じ、自分の身体に対する感覚を研ぎ澄ます必要性も感じている――そんなことを、心理学や人間関係論という私自身が携わる講義を通じて実感することもよくある。教員よりもむしろ、学生の方がより的確に身体知の必要性を感じているのかもしれない。

身体知の実験授業はまさに、"死と再生"のプロセスを経ながら、自己を成熟させていく営みであった。プロセスの中で、時に葛藤や抵抗感が生起しながらも、大きな流れの中で、ゆったりと新しいものへの気づきの喜びや安定感、自己に対する信頼感が少しずつ紡ぎだされていた。今、大学で必要とされているもうひとつの知の姿を確かにそこに見た。

PROFILE

慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室准教授 1991 年慶應義塾大学文学部卒業、1994 年慶應義塾大学大学院 修士課程 社会学研究科修了、1998 年東京大学大学院 博士課程 教育学研究科修了。武蔵工業大学環境情報学部助教授、慶應義 塾大学理工学部助教授を経て、2007 年より現職。

専門はジェロントロジー、生涯発達心理学。 博士 (教育学) 大学では学部学生を対象に、人間関係論 I · Ⅱ、心理学 I · Ⅱ の講義を担当するとともに、臨床心理士として慶應義塾大学学 生相談室にも関わる。

慶應義塾大学教養研究センター

2007 年度基盤研究 身体知プロジェクト 研究会報告「体をひらく、心をひらく」 - 2006・2007 年度の身体知実験授業を振り返って-

2008 年 3 月 31 日発行 編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター 代表者 横山千晶

> 〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1 TEL 045-563-1111(代表) E-mail lib-arts@adst.keio.ac.jp http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/

©2008 Keio Research Center for the Liberal Arts 著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。 ISSN 1880-3628

ISBN 978-4-903248-17-2